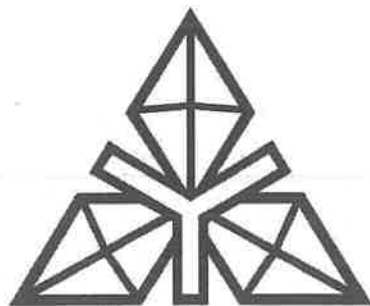


令和2年度

授 業 研 究

第27号



秋田県立秋田高等学校

目 次

《巻頭言》

高校の授業を考える……………校長 渡部克宏

—本年度の研修テーマ—

生徒の「深い学び」を基盤とした授業の実践
～他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して～

【令和2年度授業研修年間計画】

令和2年度秋田高校授業研修年間計画 概要……………企画研修部…………… 1

【令和2年度授業改善[3本の柱]】

令和2年度秋田高校授業研究テーマについて……………企画研修部…………… 2

【前期授業の振り返り】

前期授業アンケートの検証および後期授改善について……………企画研修部…………… 3

【校内授業研究（後期）】

授業改善強化月間要項……………企画研修部…………… 4

実施要項……………企画研修部…………… 5

地歴公民科……………伊藤健一……………12

数学科……………松井優介……………15

理科……………山田 晋……………18

芸術科……………池田孝幸……………21

研究会アンケート結果……………企画研修部……………24

【Google for Education】

Google for Education 意識調査結果……………企画研修部……………31

【個人研究】

『宋史』列伝における人物評価

～五代・北宋初期を中心に～……………坂本公正…………… 33

高校の授業を考える

校長 渡部 克宏

これまで様々な授業を見てきました。高校だけでなく、小学校や中学校、特別支援学校、さらには大学や幼稚園の授業も参観してきました。いろいろな授業を見ながらあれこれ思いを巡らしてきた中で、皆さんに伝えておきたいと思うことがいくつかあります。その中から3つほどお話させていただきます。

高校の授業は大学の学問の水割りではない

大学の先生が高校に来て、大学よりも少し易しく、大学の内容を薄めた授業をしても、おそらく高校では通用しないでしょう。同様に、高校の授業を多少濃くして難易度を上げて大学に近づけても大学の授業にならないと思います。高校の授業には固有の価値、固有の論理があります。大学の授業の下請けではないのです。

板書をしながら、あるいは生徒とやりとりをしながら、次の展開を考えているとき、頭の中は高速度で回転しています。慣れっこになっているので、なんとも思わないかもしれませんが、私たちが考えている以上に授業は高度な知的作業です。外部のゲストティーチャーや教育実習生が最初に授業したときの反応を見ればよくわかります。簡単にできると思っているのに、授業を初めたとたん、あれっ？と立ち往生することがよくあります。ところで、中学校の授業も高校の下請けではないことも気づいておきたいものです。

授業を考えると、目の前の生徒の現実からスタートするか、それとも達成すべき目標からスタートするか

今から10年くらい前のことですが、中学校の初任者研修で、初任の若い先生方に指導主事の先生が発した問いです。義務教育には、日本全国、どんな山奥でもどんな離島でも、子どもたちに同じ内容を同じレベルで教え、同じ成果を上げるという重大な任務があります。内容とレベルを決めるのは学習指導要領であり、それを外れることは許されないのです。「達成すべき学力水準」は学習指導要領に定められていますから、この問いは、実は、生徒の現実と、学習指導要領のどちらを重視すべきか、という問いなのです。問いを受けた初任者たちは黙ってしまいました。最後に、全員がおそろおそろ「生徒の現実」と答えてくれたとき、私は感動しました。それを言うまでどれほど葛藤があったか、おそらく高校の先生には想像ができません。では高校の教師はどう答えたらいいのでしょうか。私の答えは簡単です。「生徒の現実」に決まっています。

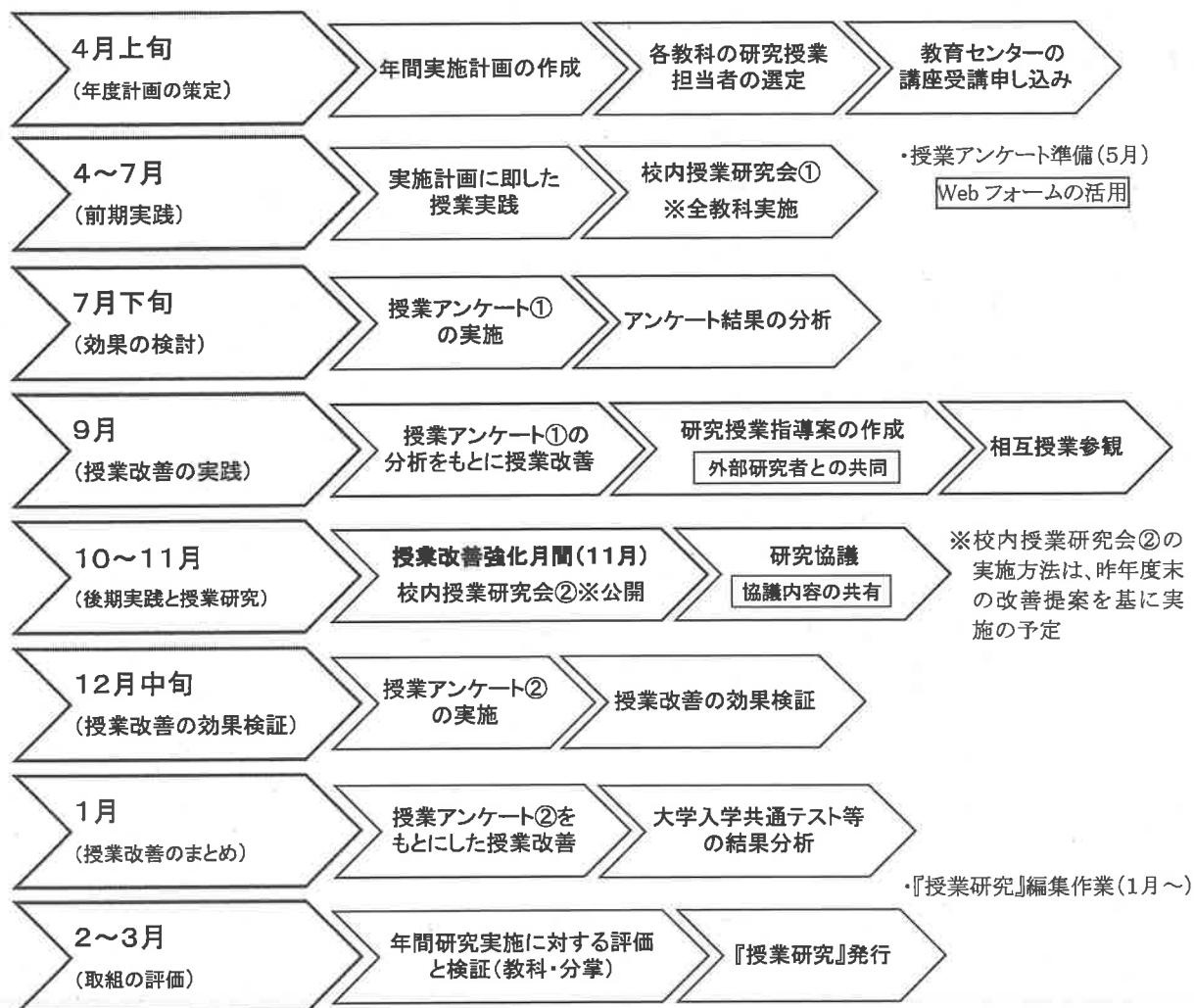
授業を評価する観点はたくさんあるが、学校の教育目標は最も重要な観点である

「これはセンター試験に出ます。だから重要です。」これも10年近く前のこと、ある高校で、授業しながら先生が言っていたフレーズで、繰り返されるたびに授業から品性が失われていきました。センター試験に出るから重要なのではなく、重要だからセンター試験に出るのです。そこをはき違えて目先のことや現実的利害を学びの動機付けとすべきではないでしょう。

理想とする授業を求め、テーマを設定し、その実現を目指すことだけが授業改善ではないはず。それ以前に、自校の目指すもの、つまり教育目標の実現に資するものになっているか、それが授業評価の上で最も優先されなければならないものだと思います。「品性の陶冶」を教育目標の筆頭に位置付けている本校では、「その授業に品があるか」ということが授業評価の最初の視点になるのではないのでしょうか。

授業研究の巻頭言なのに、授業に対する自分なりの見方考え方を整理する場にしてしまいました。こうした機会をいただいたことに感謝し、1年間の授業研究の取り組みに心から敬意を表したいと思います。

秋田高校授業研修（授業改善）年間計画 概要



「品性の陶冶～わが生わが世の天職いかに」 — 秋高キャリア教育テーマ 「秋高授業実践五項目」

- [1] 興味関心の高揚
教科の専門知識を駆使し、内容を掘り下げ、生徒にその分野に進んでみたいと思わせるような、興味や意欲を喚起する授業。
- [2] 人間力の錬磨
専門教科の学びを深めることで、人間性や社会性を磨く授業。人間や人生、社会について考えさせる、プラスαのある授業。
- [3] 思考力の養成
生徒に問題意識を持たせ、なぜ、どうしてと自ら考えさせる授業。自分自身で問題を解く力を鍛える授業。
- [4] 表現力の向上
自らの言葉で、自らの思いを表現する力を養う授業。
言語活動を充実し、主体的・協働的な態度やコミュニケーション能力を鍛える授業。
- [5] 受験力の強化
受験問題を徹底的に研究し、指導方法を工夫し、授業の随所にそれを応用することによって、生徒に着実に受験力をつける授業。受験情報を提供する授業。

令和2年度 秋田高校授業研究テーマについて

企画研修部

生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践
～他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して～

今年度の授業改善[3本の柱]

重点課題

① 主体的な課題解決を促すための「主発問」「補助発問」の提示

- ・授業のゴールを可視化し、深い思考を導く主発問を練り上げる。
- ・生徒の興味や関心を高め、持続させる効果的な補助発問を工夫する。

② 問いを解決するための「他者との協働」の在り方の工夫 ～コロナ禍での授業形態、コミュニケーションの取り方の工夫～

- ・三密にならない机の配置や、ICTの効果的な活用など授業形態を工夫する。
- ・課題の共有と方向合わせを大切にしながら主体的な取組を促す。

③ 生徒の思考力・判断力・表現力を育むための「言語活動の充実」

- ・自己の思考を積極的に言語化し、他者の意見を認め学び合う活動を工夫する。
- ・安心して発言できる環境や、具体的な意見を引き出す質問の組み立てを工夫する。

※なお、[3本の柱]の①②を「指導主事等の学校訪問」(2回目・10/23)に向けた
重点課題に設定し取り組みます。

前期授業アンケートの検証および後期授業改善について(教科別一覧)

教科	アンケート結果の概略	アンケート結果から見える教科・科目の課題点	後期授業改善の具体的方策
国語	とてもそう思う・そう思うとの回答がほとんどで、各項目とも一定の達成は見られる。が、とてもそう思う・そう思うの比率が項目や学年によって異なる点もあり、その項目については課題として考えていかなければならない。	項目Ⅱ(2)先生の板書や資料は見やすい。 黒板の字の小ささや読みづらさ、プロジェクターで黒板に投影した際の見にくさについて指摘する記述が見られた。 項目Ⅳ(1)興味・関心をかきたてる授業内容である。 教材の背景にある古典常識や、関連することがらなどを織り交ぜながらの授業を高く評価する記述がある一方で、「とてもそう思う」よりも「そう思う」の比率が比較的高い項目。教材の読みを広げられるような知識や話題提供が必要。 項目Ⅴ(1)自身の進路目標と照らし、それ以上の学力レベルへの到達が期待できる授業である。 学年・クラスによって違いはあるが、「とてもそう思う」よりも「そう思う」の比率が比較的高い項目。授業内容が自分の力を高める上でどのような意味を持つのか、生徒自身に理解させることが必要。	まず、できる限り大きく丁寧に板書することはもちろんであるが、見にくさや読みづらさ等、生徒に確認することを習慣としたい。 当然のことではあるが、毎時の授業の目標、そのために考えてほしいことは何かという問い、授業を通してどのような力をつけようとしているのか等について、授業担当者間で共有すると共に、授業内や国語科通信等で生徒へのアナウンスを一層明確にする。 教材理解を深めるために、背景にある事情や関連する事柄等を教科担当者で共有し、授業に生かすことに取り組みたい。
地理公民	全体的に良い評価となっているが、その一方で授業内の言語活動やコミュニケーションの不足、進度に対する不安などを感じている生徒が多い。	①生徒と生徒、教員と生徒のコミュニケーションの機会が少ない。 ②進度に対する不安(速い・遅い) ③板書量の多さ、スライド文字の大きさ等により、ノートやプリントをまとめるのが容易ではない。 ④確認テストの実施(多い、少ない)	①コミュニケーションについては、休校後の進度確保のため、ペアワークやグループ学習は例年よりできていないことは確かである。今後、思考力の深化などを意識し、絞り込んだ「対話ポイント」(主発問や補助発問)を計画的に盛り込み、授業を展開したい。 ②進度については、2年生が深刻な状況になっており、教科内ではこれが最大の課題だと考えている。項目を大きく省略するか削るかするなど根本的な方法をとりたいと考えている。また、不安を解消するために、進度の見通しについて具体的に生徒へ知らせることも必要である。 ③板書等において情報量が多すぎて(詰め込みすぎて)分かりづらくなっている。精選等を行っていく。 ④定期的に定着度を確認することは必要だが、それに追われすぎている面もあるので、頻度等を工夫したい。
数学	それぞれの数値については、概ね良好である。生徒の自由記述にあるコメントに対して、対応を行う必要がある。	・指示が分かりにくい。 ・授業進度が遅い。 ・説明不足な部分がある。 ・生徒を動かし切れていない。 ・生徒同士のコミュニケーションをとらせたい。	・目標を明示し、扱う内容を明確にする。 ・生徒に板書させてそれを解説する形態から、教師からの説明を多くし、プリント演習を行うことで、進度が遅いと感じる生徒へ対応する。 ・パソコンとプロジェクターを使って、生徒の興味を持たせるような教材を用いて授業を行う。 ・復習プリントを用いて過去の問題をやり直す。 ・グループ、ペアワークを行い、生徒の発言を増やす。生徒の発言から話題を拾い上げ、教師・生徒間のコミュニケーションを多くする。
理科	グループ活動・言語活動が少ない 双方向のコミュニケーションがあまりとられていない。	生徒の考えを話し合わせて発表させたりすることが少ない。	コロナで実験が行われておらず、これから多くなるので、生徒の活動は増える。授業内で効果的な発問をすることをより意識して行う。
保健体育	視聴覚教材の画像が古い	興味関心が高まるよう新しい教材の購入について依頼していきたい	・体育では、選択授業を開始するので、習得した技能を他者と連携してゲーム活かすことができるよう話し合いの場を設ける。 ・保健では、引き続き、視聴覚教材を活用し、自己の健康の保持増進に向けて実践できるよう、他者との話し合いから生活スタイルの改善につながるよう指導していきたい。
芸術	音楽Ⅰは、すべての項目において概ね良好の結果が得られた。一方、美術Ⅰでは約40%、書道Ⅰでは約65%の生徒が「グループワークや発表・説明等の言語活動の機会がある」について、「そう思わない(美38.5%、書50.0%)」「まったくそう思わない(美2.8%、書14.5%)」と回答している。なお、音楽Ⅰでは、「歌唱を行わないこと」という文科省の指示により、前期は楽典と器楽に絞って取り組んだことから、言語活動の機会が充実したものと思われる。それに対し、美術Ⅰ、書道Ⅰは個人による表現活動が中心であった。相互鑑賞や他者の評価等で言語活動・グループワーク等は行われたものの、他教科と比較すれば生徒には物足りなさがあったものと思われる。	・美術Ⅰ、書道Ⅰにおける「言語活動の充実」については、それぞれ科目の特性を生かし、必要な活動を積極的に取り入れていく必要がある。 ・各科目において、項目によっては若干名の生徒が「そう思わない」と回答していることに留意して改善を図る必要がある。	・芸術科における「言語活動の充実」において、作品について互いに批評し合う活動が重要であることから、単元ごとに、表現意図の説明・振り返り・批評などの言語活動(文章による可視化、意見交換等)の時間を充実させる。その際、ワークシートの設問を工夫し、より具体的な意見を記述しやすいよう配慮する。 ・生徒は概ね、各単元において高い興味関心を持ち、目標を理解し主体的に学習に取り組んでいるが、わずかで「そう思わない」と回答した生徒がいることに留意し、学習内容の提示方法や説明を工夫し、発問と応答の仕方などの改善を図っていく。
英語	教師の説明や指示、授業構成・進度、学力向上等の項目で概ね高評価を得ている。クラスによる差も大きくない。	「授業構成・進度」「学力向上」において概ね高評価である理由として、各学年とも全クラスで教材、小テスト等を統一、共有しており、生徒の不公平感が少ないことが考えられる。今後も継続したい。	今後も学年内で教材、情報を共有していく。時事問題等、最新トピックに関する英文などの投げ込み教材も活用、全クラスで共有し、生徒の知識、思考力の深化を図る。効果的な教材や教授法について、学年を超えて科で共有していく。
家庭	生徒の「興味・関心」の評価が高いとは言えないことと相関して「学習意欲」の評価も高いとは言えない。自由記述からは、学習目標の提示や授業の構成(グループワーク・実習)、授業のテンポ、ワークシートの構成等について好意的な内容が多かった。	学習内容が、自己の現在・将来の生活に密接に関わることをさらに強調して学習意欲の高揚を図るとともに、指導手法や学習形態等の工夫・改善し魅力ある授業作りが必要である。	学習内容に中学校校までの既習事項も含まれるが、課題解決学習や教科横断的学習を取り入れるなどして、秋高生としての知的好奇心も高めながら主体的に学習に取り組めるよう工夫する。 課題解決学習においては言語活動による他者との協働の効果的な手法も工夫したい。
情報	授業に対する意欲・姿勢、説明や指示内容、授業構成・進度に関しては良好である。グループワークや発表などの言語活動があまりなかったとの結果だった。	前期前半はスライドによる説明が中心であり、実習や演習などを毎時間取り入れたが、発表などの言語活動やコミュニケーションの機会がとれなかった。	後期は数学Ⅰで学んだデータの分析や表計算ソフトを用いて、「問題解決」のプロセスを扱う予定である。教師による発問や生徒同士の話し合いを通して、データの見方や問題解決方法について考えさせていきたいと思う。

令和2年度

秋田県立秋田高等学校

授業改善強化期間

10月1日(木)～11月30日(月)

研究テーマ

生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～ 他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して ～

主な日程

- 10月 1日(木) 授業参観の実施開始
10月 7日(水) 教科打合せ
・第3回校内授業研究に向けた指導ポイントの確認
10月29日(木) 指導案提出
『生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践
～ 他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して ～』
11月 2日(月) 参加者の申し込み締め切り
11月 5日(木) 教科打合せ
・第3回校内授業研究における役割分担と指導の最終確認
11月12日(木) 第3回校内授業研究会(公開)

受付 14:00～14:20

授業参観 14:30～15:25(55分)

協議会 15:40～16:30(50分)

授業者 伊藤 健一 (地歴・日本史B) 2年

松井 優介 (数学・数学A) 1年

山田 晋 (理科・物理) 2年

池田 孝幸 (芸術・音楽I) 1年

11月13日(金) 第2回校内授業研究会「教科協議会報告書」の提出



令和 2 年度 校内授業研究会（公開）

研究テーマ 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して～

- 受 付 14:00～14:20 (20分)
- 授業参観 14:30～15:25 (55分)
- 協議会 15:40～16:30 (50分)

〔 研 究 授 業 一 覧 〕

教 科	科 目	指導者	クラス	会 場	協議会	内 容
地歴公民	日本史B	伊藤 健一	2AB	31	31	幕府の衰退と庶民の台頭 ～諸産業の発達と社会の変動～
数 学	数学 A	松井 優介	1G	1G	1G	第3章 図形の性質 第3節 作図
理 科	物 理	山 田 晋	2D	21	21	正弦波の表し方
芸 術	音楽 I	池田 孝幸	1E	音楽室	22	「リコーダー三重奏のためのパルティータ」 (I. Allegro)

□ 指導助言者一覧

所 属	職 名	氏 名	教 科
秋田県総合教育センター 教科・研究班	主任指導主事	阿 部 智 博	芸術(音楽)
秋田県総合教育センター 研修班	指 導 主 事	加 藤 昌 宏	地 歴
秋田県教育庁高校教育課	指 導 主 事	伊 藤 淳	数 学
秋田県立大館鳳鳴高等学校	教育専門監	小 野 耕 右	理科(物理)

□ 校外参観者一覧

番号	学校名または所属名	職 名	氏 名	参観教科	協議会
1	国立大学法人秋田大学高大接続センター	教 授	伊 藤 成 年	数 学	○
2	国立大学法人秋田大学理工学研究科	准 教 授	山 本 良 之	理 科	
3	国立大学法人秋田大学理工学研究科	非常勤講師	岩 田 朗 子	理 科	○
4	秋田県立金足農業高等学校	非常勤講師	山 崎 真 悟	理 科	○
5	秋田県立秋田西高等学校	教 諭	伊 藤 文 人	数 学	
6	秋田県立秋田工業高等学校	教 頭	佐 藤 かおる	地歴公民	
7	秋田市立泉中学校	教 諭	泉 一 也	数 学	○
8	秋田市立太平中学校	教 諭	加賀谷 郁	地歴公民	○
9	秋田大学教育文化学部附属中学校	教 諭	江 畑 美 香	芸 術	

「秋高授業実践五項目」

- ①興味・意欲の高揚……内容を掘り下げ、生徒に更に深く学びたいと思わせる授業
- ②人間力の錬磨……専門プラスαのある授業、人生や社会について考えさせる授業
- ③思考力の養成……生徒が自ら「なぜ？」と考え、自ら問題を解く力を鍛える授業
- ④受験力の強化……受験問題の研究や指導法を工夫で、生徒に受験力をつける授業
- ⑤表現力の向上……思いや考えを自らの言葉で表現し他者に伝える力を伸ばす授業

□ 協議会 15:40～16:30 (50 分)

グループワーク／指導・助言

●日本史B

〔指導・助言〕 加藤 昌宏 氏 (秋田県総合教育センター 研修班 指導主事)

授業者：伊藤 健一
 全体進行者：秋田 法俊
 記録者：秋田 法俊

▶ファシリテーター：〔1〕菊地 文雄、〔2〕田口 琢央、〔3〕村越 裕悦

グループ1		
No.	氏 名	教科・科目
1	加賀谷 郁	太平中学校
▶ 2	菊地 文雄	地公・日
3	佐々木 裕之	地公・地
4	富樫 良恵	国語

グループ2		
No.	氏 名	教科・科目
1	打川 史子	英語
2	佐賀 薫	英語
3	佐々木 繁樹	国語
▶ 4	田口 琢央	地公・世
5	中嶋 修子	地公・公

グループ3		
No.	氏 名	教科・科目
1	太田 伸子	英語
2	須田 真	英語
3	藤澤 真樹	地公・世
▶ 4	村越 裕悦	地公・地
5	伊藤 雄拓	実習生

●数学A

〔指導・助言〕 伊藤 淳 氏 (秋田県教育庁高校教育課 指導主事)

授業者：松井 優介
 全体進行者：佐々木 充宏
 記録者：佐々木 充宏

▶ファシリテーター：〔1〕佐藤 真弓、〔2〕澁谷 明人

グループ1		
No.	氏 名	教科・科目
1	伊藤 成年	秋田大学
2	神尾 健太郎	数学
▶ 3	佐藤 真弓	数学
4	高橋 健	数学・情報
5	三浦 千寿子	英語
6	米川 覚	数学

グループ2		
No.	氏 名	教科・科目
1	泉 一也	泉中学校
2	加賀 智大	数学
3	斉藤 尚史	数学
▶ 4	澁谷 明人	数学
5	高橋 奨	国語
6	高橋 大	数学
7	榎山 聖陽	実習生

●物理

[指導・助言] 小野 耕右 氏 (秋田県立大館鳳鳴高等学校 教育専門監)

授業者：山田 晋
 全体進行者：三春 智弘
 記録者：三春 智弘

▶ファシリテーター：[1] 金野寛之、[2] 西村航平 [3] 西村充司

グループ1		
No.	氏 名	教科・科目
1	茜谷 信也	理科・生
▶ 2	金野 寛之	理科・化
3	佐藤 武	理科・化
4	角崎 綾子	英語
5	山崎 真悟	金足農業高
6	堀 友樹	実習生

グループ2		
No.	氏 名	教科・科目
1	伊東 裕	保体
2	沢田石 智	理科・地
3	土門 高士	国語
▶ 4	西村 航平	理科・物
5	村上 恵美子	理科・助
6	斎藤 泰知	実習生

グループ3		
No.	氏 名	教科・科目
1	岩田 朗子	秋田大学
2	遠藤 金吾	理科・生
▶ 3	西村 充司	理科・化
4	露崎 由美子	理科・助
5	泉部 拓人	実習生

●音楽Ⅰ

[指導・助言] 阿部 智博 氏 (秋田県総合教育センター 教科・研究班 主任指導主事)

授業者：池田 孝幸
 全体進行者：森川 勝栄
 記録者：森川 勝栄

▶グループ・ファシリテーター：[1] 牧留美子、[2] 加茂玲子

グループ1		
No.	氏 名	教科・科目
1	笹 渕 夏子	英語
2	佐藤 利正	英語
3	塚田 博	保体
4	南都 勲	保体
▶ 5	牧 留美子	国語
6	山田 公一	保体

グループ2		
No.	氏 名	教科・科目
1	浮田 元子	養護教諭
2	加茂 玲子	家庭
3	坂本 公正	国語
4	佐藤 栄幸	保体
5	菅野 愛	国語
6	目黒 大祐	保体

□ 協議会の進め方

[協議会の形式]

◎ワークショップ形式で「マトリクス法」を用いて協議します（グループ→全体）

マトリクスとは $n \times n$ の表です。今回の協議会では 3×3 の表を用います。

[タテの項目] ①よい点・取り入れたい点／②課題／③改善の具体的手立て

[ヨコの項目] ①主発問／②協働の取り組み・言語活動／③授業全般

★マトリクス法のメリット

- ・付箋をセルに置きながら話すので効率的になる
- ・授業改善の視点がどこにあるのか可視化される

[協議時間]

15:40～16:30（50分）

[次第]

I. 開会

II. 授業者、指導・助言者の紹介

III. ワークショップ

- ① 説明
- ② 授業参観の振り返り ※個別の活動
- ③ グループワーク
- ④ 全体共有

IV. 指導・助言 ※全体での活動

V. 閉会

[ワークショップの流れ]

1. 目的と方法の共有 ◎全体進行から説明があります

2. 授業参観の振り返り [10分程度] ※個別の活動 ◎ファシリテーターがリードします

【主発問・補助発問】【他者との協働】【授業全般】について、それぞれ「よい点（青色付箋）」
「課題（黄色付箋）」「改善の具体的手立て（ピンク付箋）」に分けて整理します。

★付箋にヨコ書きしましょう

★付箋1枚につき、一つの内容を具体的かつ簡潔に書きましょう

★ラッシャペンを使い、できるだけ大きな字で書きましょう

3. グループワーク [20分程度] ◎ファシリテーターがリードします

(1) 付箋の内容を紹介しながら似たものや関連するものを出し合ひましょう

(2) 内容が近いもの同士をまとめましょう

★小見出しをつけたり、因果関係のあるものや対立するもの等を結んだりして、

意見・アイデアの構造化を図りましょう

→ 良かった点について共通理解を図りましょう

→ 課題と感じたところを話し合ひましょう

→ 授業者に対する改善の具体的手立てを提案し合ひましょう

4. 全体共有 [10分程度] ◎全体進行がリードします

(1) グループワークの成果発表

★各グループの成果を共有しましょう

★時間があれば、グループ発表への質疑を行ひましょう

(2) 研修成果の確認

★授業改善のポイントを整理しましょう

★授業者からコメントをいただきます

■協議会の振り返りについて

◎「google フォーム」で振り返りを行います（校内参観者）

【質問項目（予定）】

- ・ワークショップ（評価）▶ ワークショップから見えた授業改善の課題（自由記述）
- ・授業研究会全般（評価）▶ 研究会を通しての感想、自身の考えの変容（自由記述）
- ・明日から、自身の実践で変えていきたいこと（自由記述）

授業参観シート

★授業参観でメモし、協議会のグループワークに役立てましょう

■ 授業参観の視点

構成と主発問	教師の説明等	板書と教材等	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
- 授業目標の明確化 - 魅力ある主発問 - 学びの空間、言語活動	- 発問の質や効果 - 言葉や表情	- 視認性、計画性 - プリント、教材	- 課題の発見・解決 - 問いを発する	- 表現し意見を共有 - 考えを深め合う協働	- 内容の掘り下げ - 単元の見方・考え方

※協議会のグループワークでは、【主発問・補助発問】【他者との協働】【授業全般】について、それぞれ「よい点（青色付箋）」「課題（黄色付箋）」「改善の具体的手立て（ピンク付箋）」に分けて整理し協議します。

	主発問・補助発問	他者との協働	授業全般
よい点（青）			
課題（黄）			
改善の手立て（ピンク）			

地歴・公民科（日本史B）学習指導案

日 時 : 令和2年11月12日(木) 6校時
 場 所 : 31番教室
 対 象 : 2年AB組 38名
 授 業 者 : 伊藤健一
 教 科 書 : 『詳説日本史』山川出版社

1 単元(題材) 名

幕府の衰退と庶民の台頭 ～諸産業の発達と社会の変動～

2 単元(題材) の目標

- (1) 資料・史料を活用し、中世の社会・経済が大きく変動していく様相を理解する。 (「知識及び技能」)
- (2) 中世社会の意義について、他者との協働の中で根拠に基づき考察し、説明する。 (「思考力、判断力、表現力」)
- (3) 中世社会を多面的に捉え、変化に対応し社会が形成されたことを理解する。 (「学びに向かう力、人間力等」)

3 単元(題材) と生徒

(1) 単元(題材)

幕府の衰退と庶民の台頭 ～諸産業の発達と社会の変動～

(2) 生徒観

男子16名、女子22名、計38名の文系クラスである。真摯な姿勢で授業に臨んでおり、発問に対する反応も良い。日本史に対する関心が高く、歴史事象を多角的に理解しようとする姿勢が見られる。

(3) 指導観

資料・史料を用いて歴史の具体像が復元されていく過程を追体験させる中で、大きく変動していく中世社会の様相やその位置付けを考察・表現させながら、変化に対応し主体的に社会を形成していく意義を考える契機としたい。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して～

中世社会が大きく変化していく過程やその特色について、他者との協働の中で資料・史料を読解・活用し考察するとともに、同時代を生きる人々が変化に対応しながら主体的に社会を形成していく意義について考えさせる。

5 単元(題材) の指導計画

幕府の衰退と庶民の台頭 (総時数4時間)

- (1) 惣村の形成 ……1時間
- (2) 幕府の動揺と土一揆 ……1時間
- (3) 応仁の乱と国一揆 ……1時間
- (4) 農業・商工業の発達 ……1時間 (本時4/4) ※鎌倉時代の経済・産業等も含めて扱う

6 単元(題材) の評価規準

	(ア) 関心・意欲・態度	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 技能	(エ) 知識・理解
評価の観点	・中世の社会・経済が大きく変動していく過程を、資料・史料に基づいて理解しようとしているか。また、積極的に他者との協働に参加しているか。	・他者との協働の中で、合理的に歴史を復元・構築できているか。また、その過程や意義を適切に表現することができたか。	・資料や史料より、商業経済が浸透していく背景やその特色を読み取ることができたか。また、得られた情報について、合理的解釈ができているか。	・産業の発達や社会の動きについて、様々な歴史資料・史料を多面的・多角的に捉え、中世社会の様相を理解できているか。

7 本時の計画 (本時 4 / 4 時間)

(1) 本時の目標

- ・資料を幅広く活用し、商品経済の浸透および社会の変動についてその様相を理解する。【知識及び技能】
- ・商品の発生と流通、社会の変化について、協働の中で意義を考察し、説明する。【思考力、判断力、表現力】
- ・社会の変化や人々の動きを、後世の社会の形成と関連付けながら捉える。【学びに向かう力、人間力等】

時間	生徒の学習活動	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 5分	・『秋田街道絵巻』『秋田風俗絵巻』を見て、近世秋田の一端に触れる。 【一斉】	・本時の内容が、その後の経済活動の活発化や広域化につながることを意識させる。	・資料に基づく歴史理解に関心を示しているか (ア)	・観察、発言
	主発問『大きく変動する中世社会・経済の具体的様相を、日本史上においてどのように位置付けるか。』 ～「画期・転換点」としての中世～			
展開 43分	・ヒト・モノ・情報の移動に関する歴史、および流通の条件について考える。 【グループ】	・経済史について、既習事項を確認させる。	・積極的に意見交換できているか (ア)	・観察、発言、ワークシート
	・産業の発展を示す資料・史料より、その様相を捉える。【一斉、グループ】	・平泉の交易に触れる。 ・文献資料や絵画資料など、様相を捉える材料を幅広く用いる。	・資料より情報を得られているか (ウ)	・観察、発言、ワークシート
	史料を読解し、中世の経済活動が活発化する様相をとらえる。			
	・鎌倉時代の年貢品や納入方法に注目し、その特色を捉える。【一斉、グループ】 ・『兵庫北関入船納帳』より、積荷の特色を捉える。【一斉、グループ】	補助発問「商品流通が一般化する前提条件とは何か。」		
	商品経済が浸透していく過程を捉え、その意義を考察・表現する。	補助発問「年貢品の地域的差異が生じるのはなぜか。」	・産業の発達や社会の変化について、その様相を理解できているか (エ)	・観察、発言、ワークシート
		補助発問「年貢納入の方法にはどのような変化がみられるか。」		
		補助発問「なぜ商品が大量に発生したのか。」	・中世経済の変化とその意義を考察・表現できているか (イ)	・観察、発言、ワークシート
		・北東日本海交易に触れ広範囲の流通に関心を持たせる。		
まとめ 7分	・商品経済の浸透による社会の変動を、中世以降の社会形成と関連付けて、考察する。【グループ】	補助発問「商品経済の浸透は後世に何をもたらすのか。」	・中世社会全体の變動をどう捉えているか (イ)	・観察、発言、ワークシート

協議会報告

●科目名【 日本史B 】 記録者：秋田法俊（地歴公民）

	主発問・補助発問	他者との協働	授業全般
よ い 点	【発問の設定】 ●明確な主発問・補助発問 ●豊富な資料に基づく発問 ●深く考えさせる発問内容 【評価活動の充実】 ●時系列で確認させている	【小さいホワイトボード活用】 ●生徒の発言や考えが可視化 ●板書と組み合わせ可視化 【意見交換・発言のし易さ】 ●グループ毎に協議テーマ ●他グループ発表に関心持てる 【活動の障形】 ●生徒が主役のグループ設定（半円状の机配置）	【史料（資料）の活用】 ●豊富な史料、地元史料を活用 ●生徒の史料読み取り力が高い 【学習事項の提示】 ●既習事項確認がほどよく含まれ、テンポ良い説明 【学習活動の補完】 ●生徒の発表に程よく補足 ●記入式プリントの活用（グループ協議にも対応）
課 題	【主発問の提示・扱い】 ●主発問は口頭でのみの提示 ●主発問と目標との区別が分かりづらい ●発問が大局的な内容でポイントが絞れない 【史料への着目の仕方】 ●史料の注目点に迷う生徒（生徒により異なる）	【机配置、グループの大きさ】 ●横に広がった机配置 ●関われない生徒もみられた 【グループ間の協働】 ●グループ間協働時間が少ない ●考えを共有する場面が少ない 【グループ活動の主体性】 ●発問の本質を理解していない生徒への対応 ●史料解釈のグループ差 ●活発な班とそうでない班の差	【プリントの構成】 ○プリント記入欄の設け方（どこに何を書くか迷う） 【資料の提示のしかた】 ○絵画史料の読み取りは難しい ○スライドの見せ方
改 善 の 手 立 て	【主発問の提示・扱い】 ○主発問を板書する ○解答形式を複数組み合わせる（論述のほかマッピング形式など） 【史料への着目の仕方】 ○注目箇所を強調する、板書する	【机配置、グループの大きさ】 ○できるだけ対面できる形に ○人数は3～4人以内に 【グループ間の協働】 ○グループ活動の指示内容や流れを明確にする ○考察時間と意見共有時間を区別 【グループ活動の主体性】 ○生徒がつまづきやすい箇所をサポートを早めに行う ○机間巡視でつまづきを発見	【プリントの構成】 ○記入欄の構成を工夫する 【資料の提示のしかた】 ○ヒントの提供（強調も意識） ○スライドのズームアップ
指 導 ・ 助 言	●テンポ良い展開で、資料も豊富である ●表現させることも盛り込んだ内容である（今後の「探究」科目を見据えると必要なこと） ●通史的内容なので、今後近世を扱う際にまた取り上げるとよい 【主発問のポイント】 本時の目標を過不足なく表現できたか、どの生徒も理解できる表現か、明確さを意識 【評価のポイント】 場面ごとの適切な評価を行えているか、テストだけでなく次に繋がる形成的評価が重要（昨今の感染症拡大状況のなか、これから受験期を迎える生徒に安心感を持たせる）		

数学科（数学A）学習指導案

日 時 : 令和2年11月12日(木) 6校時
場 所 : 1G教室
対 象 : 1年G組 34名
授 業 者 : 松井 優介
教 科 書 : 『詳説 数学A』啓林館

1 単元(題材) 名

第3章 図形の性質 第3節 作図

2 単元(題材) の目標

- (1) 基本的な図形の性質を用いて、作図のための方針を説明したり実際に作図したりすることができる。（「知識及び技能」）
- (2) 基本的な図形の性質から、作図のための方針を立て、その方法が正しいことや、作図したすべての点が条件を満たしていることを考察することができる。（「思考力、判断力、表現力」）
- (3) 基本的な図形の性質などをいろいろな図形の作図に活用しようとする。（「学びに向かう力、人間性等」）

3 単元(題材) と生徒

(1) 単元(題材)

ラグビーにおけるコンバージョンキックを題材にして、角度が最大になる点を作図する問題を考える。作図する方法を考えさせることで、さまざまな図形の性質を総合的に活用させる。

(2) 生徒観

学習習慣が身に付いていて、成績が良い生徒が多いクラスである。授業では大人しく、教師の問いかけに対しての反応が薄いこともあるが、内容については理解していることが多い。現実の世界の事象を数学的に扱うことで意欲を喚起し、他者と協働して問題解決に向かうようにしたい。

(3) 指導観

作図という単元は現行の学習指導要領にて含まれた内容であるが、大学入試で作図させる問題が出ることはないため、進学校ではあまり時間をかけない部分と思われる。実際に作図できる技能だけではなく、さまざまな図形の性質を活用させたり、なぜその作図法になるのかを考察させたりして、図形の問題をさまざまな視点でとらえて解けるようにしたい。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して～

- ・現実の世界の事象を数学化し、そこに現れる問題の解決を通して、数学的に考える資質を育成する。

5 単元(題材) の指導計画

第3章 図形の性質 3. 作図(総時数2時間)

- (1) 作図 …2時間(本時2/2)

6 単元(題材) の評価規準

	(ア) 関心・意欲・態度	(イ) 数学的な見方や考え方	(ウ) 数学的な技能	(エ) 知識・理解
評価の観点	・基本的な図形の性質などをいろいろな図形の作図に活用しようとする。	・基本的な図形の性質から、作図方法を考え、その方法が正しいことや、作図したすべての点が条件を満たしていることを考察することができる。	・基本的な図形の性質を用いて実際に作図することができる。 ・作図方法を説明することができる。	・基本的な図形の性質から作図するための方法を理解し、基本的な知識を身に付けている。

7 本時の計画（本時 2／2時間）

（1）本時の目標

- ・事象を数学的にとらえ、図形の問題として表現できる。【知識、技能等】（ウ）
- ・問題を数学的に表現し、図形の性質や作図等を用いて考察できる。【思考力、判断力、表現力等】（イ）

（2）展開

時間	生徒の学習活動	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 10分	・ラグビーの基本的な得点の仕方について聞く。 ・周囲の人と話し合う。 ・わからない場合は周囲の生徒から説明してもらい理解する。	・ラグビー部の生徒に説明させ、必要に応じて補足する。 ・キックの位置を決めるとき、得点しやすいようにするには何に注目すればよいか考えるよう指示する。 ・必要に応じて、教室の入り口をゴールに見立て、得点のしやすさについて実感させる。 ・指名し答えさせる。		
	主発問：角度が最大になるのはどのような位置ですか。また、それはなぜですか。			
展開① 20分	・角度が最大になるのは、数学的にどのような位置であるかを考える。 予想をもとに、図をかいて話し合いながら考察する。 ・発表を聞く。	・プリントを配布する。 ・グループ分けを指示する。 ・短時間で予想を立てさせ、いくつかのグループに発表させる。 ・机間指導して話し合いの状況を確認し、必要に応じて円周角などに関する事項を補足する。 ・1つのグループに発表させる。	・円周角などを利用できているか。（イ）	・机間指導による観察
	補助発問：角度が最大になる位置を作図で求めよう。			
展開② 15分	・作図の方法を考える。 グループで話し合う。 ・発表を聞く。	・角度が最大になる位置を作図させ、作図方法の説明をプリントに記述させる。 ・机間指導し、作図方法が異なる2グループに発表させる。作図方法が異なるグループがない場合、他の方法を考えさせる。	・作図方法が正しいことを説明できるか。（ウ）	・プリントの記述
	補助発問：他の作図方法がないか考えよう。			
	・発表（説明）を聞く。	・必要に応じて方べきの定理の補足をする。 ・他の作図方法ができたグループがあれば発表させ、できていなければ説明する。		
まとめ 5分	・プリントに本時の振り返りを記入する。	・本時の振り返りを書くよう指示し、プリントを回収する。		

協議会報告

●科目名【 数学A 】 記録者：佐々木充宏（数学）

	主発問・補助発問	他者との協働	授業全般
よい点	【主発問の明確化】 - 主発問の提示までに、ICTにより問題のイメージの共有が行えた。 - 考える方向が1点に絞られていた。 【補助発問の有効活用】 - 生徒の思考の深まりに応じた追加の発問を段階的に行った。 - 思考のヒントを提示するタイミングが良かった。	【グループ活動の充実】 3～4名のグループでの活動が適切であった。 - 発表したグループに対して拍手での賞賛があった。 【グループ編成の工夫】 - 問題提示からグループ編成までの流れがスムーズだった。 - グループの作り方を視覚的に明示することで切り替えが素早く行われた。	【ICTの活用】 - スライドの提示が的確。 - よく準備されており、質が高い。 【興味・関心を高める工夫】 - 身近にある題材で、全員がすぐには解けない問題を扱った。 - 生徒による説明でクラス内の雰囲気上げることができた。
課題	【提示した問題の共有】 - 問題が「作図」で考えることについての説明が弱かった。 - 問題の意図が伝わっていない生徒に対してサポートが必要だった。問い直しがあっても良かった。 【生徒との対話】 - 生徒から上がった疑問を拾って、問題解決の方向に行けなかった。	【思考の共有】 - 発表者と教師との1対1の対話となり、全体での共有が不足。 - 様々な意見や表現を集約し、それを共有する工夫が必要。 【グループ活動と全体への指示】 - 他者の発表をきちんと聞かせる。 - 個人の活動のグループ共有、グループの活動の全体共有のメリハリが必要。	【タイムマネジメント】 - 生徒へ与える時間を明確にした方がよい。 【ICTと黒板の併用】 - 試行錯誤した思考の過程が見えない。 【発表者の明確化】 - 生徒が座ったままで発言したものを他者が聞いていなかった。
改善の手立て	【主発問の理解を深める】 - 実体験に基づく話題の提供。 - 理解不足であろう生徒にもう一度説明させる。 【補助発問による方向指示】 - 理解できていないグループに対して個別に発問を行う。 - 理解度に応じて発問をステップアップさせる。 扱う問題を明確にする工夫	【課題解決策の共有】 - 生徒の発表内容を他の生徒へ問うことで全体に広げる。 - グループ内の話題をグループ間でやりとりするよう指示する。 - 既習事項である教科書の内容を全体で確認する。 【グループ単位の活動の充実】 - グループ内での各個人の役割分担を明確にする。 グループ活動を発展させる	【クラスの動かし方の工夫】 - 個から協働への流れを作る。 - 話し合いが始まらないグループへきっかけを与える話題を提供する。 【思考過程の共有】 - ICTと黒板との併用の工夫。 - 生徒の発言を黒板に記録する。 - 生徒の何がうまくいって、何がうまくいかなかったのかを残す手立てを考える。 ICTの有効活用と過程の共有
指導・助言	- 問題が理解しやすく、すぐに答えが出ない良い題材だった。 - 作図をするための根拠はどこにあるのかについての思考および提示も必要である。 【授業構成のポイント】 - 問題解決にたどり着くために「なぜそうなるのか」といったような、どういった思考を重ねるかが大事。 - 考える時間を取り過ぎるとまとまらないことが多いのでうまく調整する必要がある。 - 授業のまとめは文章で形として残し、この授業で何が変わったのか、生徒に自己の変容を認識させる。 - 授業の振り返りを行い、改善に繋げていくことが大切。		

理科（物理）学習指導案

日 時 : 令和2年11月12日（木）6校時
 場 所 : 21番教室
 対 象 : 2年D組 44名（男28名、女16名）
 授業者 : 山田晋
 教科書 : 『物理 改訂版』啓林館

1 単元（題材）名

正弦波の表し方

2 単元（題材）の目標

- (1) 振動の伝わり方を把握し、波の進み方を理解する。波の干渉条件を理解する。 …「知識及び技能」
- (2) 波の伝わり方を数式で表し、様々な条件で数式を用いて考えることができる。
 …「思考力、判断力、表現力」
- (3) 協働的な学習により、既習事項を確認し、波動現象を解析しようとする。
 …「学びに向かう力、人間性等」

3 単元（題材）と生徒

- (1) 単元（題材）
 正弦波の表し方
- (2) 生徒観
 具体的に指示したことについては、真面目に取り組むことはできるが、自らさらに深い知識を得ようとする意欲はあまり見られない。全体的におとなしく、間違っただけを発言することに抵抗感を持っているような印象がある。ただし何人かは反応がよく、興味を持ったことに質問をしたりする。
- (3) 指導観
 正弦波の式は変位 y を表すのに、変数が2つあり、混乱する生徒が多い。式を暗記させてパターン通りに問題を解かせる方法もあるが、協働的な学習によって本質的な理解をさせたい。生徒に考えさせる事項を明確にして、段階的に理解できるように工夫する。

4 本校の研究課題との関わり

生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践～他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して～
 主発問に対して、それを生徒が解決するために協働的な学習活動を行わせる。段階的に解決できるように補助発問をして生徒の興味関心を持続させる。

5 単元（題材）の指導計画

波の性質（総時数6時間）

- (1) 正弦波の表し方 …2時間（本時1/2）
- (2) 波の伝わり方 …4時間

6 単元（題材）の評価規準

	(ア) 関心・意欲・態度	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 技能	(エ) 知識・理解
評価の観点	協働的な学習を通して、意見交換をして問題解決に向かう姿勢であるか。	グラフを活用して、正弦波の進み方について数式で表すことができるか。	正弦波の進み方をグラフに描き表すことができるか。	原点の振動を基準に考えて、正弦波の式を把握することができるか。

7 本時の計画 (本時 1/2 時間)

(1) 本時の目標

- ・媒質の振動が単振動であり、それが進行方向に伝わっていくことを理解する … 【知識及び技能】
- ・正弦波における、ある位置 x での時間的変化を式で表すことができる … 【思考力、判断力、表現力】
- ・協働的な学習により、正弦波の式についての手がかりを見いだす … 【学びに向かう力、人間性等】

(2) 展開

時間	生徒の学習活動	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 5分	・ 本時のゴールが正弦波の式を理解することであると把握する。	・ 目標を提示して、本時のゴールを明確にする。		
	＜本時の目標＞ $y = 1.5 \sin 2\pi \left(\frac{t}{5} - \frac{x}{16} \right)$ [m] の意味を波の進み方を理解して説明できる。			
展開 35分	主発問：ウェーブマシンで発生させた波の、ある時刻でのある位置の変位を求めるにはどうすればよいか。			
	・ グループで発問に対する考えを検討する。	・ 補助発問をして、生徒の考えを引き出すようにする。 補助発問：正弦波の説明・それぞれの媒質がどんな運動をしているか・振動がどのように伝わっているか ・ 生徒の様子を確認して新たな補助発問をする。	・ 協働的な活動を行っているか。 (ア)	・ 観察
	・ 主発問に対する手がかりを発表し、クラスで共有する。	・ プリントを活用し、単振動について触れ、既習の内容を活用できるように導く。	・ 波形とグラフを描くことができるか。(ウ)	・ プリントの確認
	・ 正弦波の波形を作図し、進み方を把握し、原点での媒質の振動をグラフにする。			
	主発問：正弦波においてある時刻 t でのある位置 x の変位 y を求めるにはどうすればよいか。			
	・ グループで検討した考えを発表し、クラスで共有し、正弦波の式を求める。	・ 原点での振動を基準に考えられるように補助発問をして、数式を立てられるように導く。	・ 協働的な活動を行っているか。 (ア) (イ)	・ 観察
まとめ 15分	・ 目標の式についてグループ内で説明する。 ・ 代表が発表する。 ・ 確認問題を解く。	・ 各グループにアドバイスしながら生徒の理解度を確認する。 ・ 深い学びにつなげるため、負の方向に進む正弦波について触れる。	・ 確認問題を解くことができるか。 (エ)	・ プリントの確認

協議会報告

●科目名【 物理 】 記録者：三春智弘（理科）

	主発問・補助発問	他者との協働	授業全般
よい点	【開かれた主発問】 - 形にはめない挑戦的な発問。 - 生徒の発言を拾い上げ、全体で作り上げていくという雰囲気醸成。 【流れを定める具体的な補助発問】 - 抽象的な主発問から具体性が高まる補助発問への切り替え。 - 本質へたどり着こうとする流れのある授業展開。	【協働を通して自らの課題を捉えさせる工夫】 - 生徒の協働部分の多さと授業者による必要最小限の説明。 - 生徒自らが気付くことによる単元内容の定着。 【グループ活動から全体共有】 - 発表機会を設けることで、気付きのなかったグループに対しても全体共有。	【声かけ・コーチング】 - きめ細やかな指導による学びの深化の手助け。 「誤った考え方」をあえて共有→ゴールの方向の明確化。 【ICT活用・教科書活用】 - プロジェクターとプリントの連動。 - 教科書を最後に確認したことによる、教科書内容の重要性の再確認。
課題	【抽象的な主発問】 - 発問自体の理解が難しい。 【授業展開時における補助発問内容と順序】 - 波の性質に関わる部分や記号などの意味が全員で理解できているか不透明。	【机の配置】 - コロナ禍での協働では向かい合わせは難しいので仕方ない部分もある。 4～5人のグループでも、横並びでは隣り合う生徒同士でのみの活動になりがち。 【グループ内における理解度の差】 - 先導的な生徒の固定。	【時間配分】 - まとめの時間が十分でなかった。 【理解度の異なる生徒への対応】 - 早い段階で理解できている生徒への対応。 - まとめ段階での理解度の差の存在。 【本単元と日常生活との関連】 - 抽象的な内容であり、身近に感じられなかった部分がある。
改善の手立て	【学びの構造を意識した主発問と補助発問】 - 複数ある補助発問を段階的に設定し、何に気付かせることができるかを明確にする。 【既習事項を確認するための補助発問】 - 波の基本的な性質や記号の意味などを全員で共有するための発問があればよい。 取り組むべき課題の明確化	【横並びでなくアーチ型】 - まっすぐな横並びでなく、アーチ型にすることでグループ活動が活発化するのではないか。 【個人で考える→グループで考える→全体で共有する】 - 個→グループ→全体の流れを徹底する。 学びを深めるための協働	【『考え方の欄』の活用】 - プリントの活用と考察過程の記録を徹底させる。 【身近な具体的事象との関連】 - 生徒が理解しやすい具体例を提示することで応用的な内容に発展できる。 授業内における学びの過程の記録・単元から具体的事象への発展的関連性
指導・助言	● 本授業の最大のポイントは、抽象的な主発問の意図することについて、生徒自身が気付いたこと。 ● 既習事項の確認をするなど工夫を加えることで、まとめ部分を改善できる。 【『主体的・対話的で深い学びのジレンマ』について】 ・さまざまな工夫をもって、主体的・対話的で深い学びの実践を試みても、「もっと生徒に任せる場面があってもよいのではないか」、あるいは「深い学びに至っていないのではないか」という意見が出てしまう。ゴールをどこに設定するかが課題であり、生徒を一番理解している教師を中心にして改善を重ねていくべきである。		

芸術科（音楽Ⅰ）学習指導案

日時：令和2年11月12日（木）

場所：音楽室

対象：1年E組18名（男子8名、女子10名）

授業者：池田 孝幸

1 題材名 「リコーダー三重奏のためのパルティータ」（I. Allegro）

- 2 題材の目標
- ・「リコーダー三重奏のためのパルティータ」（I. Allegro）について、楽曲を構成している要素を感じ取り、各要素の表現を工夫して演奏することができる。
 - ・リコーダー三重奏の音色や響きを味わい、演奏の相互評価をすることができる。

3 題材と生徒

（1）題材

「リコーダー三重奏のためのパルティータ」（I. Allegro） J.Haydn 作曲／W.Bergmann 編曲
ソプラノ・アルト・テナー3種類のリコーダーによる響きを味わい、楽曲を構成する要素を知覚した上で演奏を作り上げていくことは、より深くリコーダーアンサンブルへ親しむことにつながると考える。

（2）生徒観

明るく活発で授業中積極的に活動することができる。生徒同士での練習や活動もしっかりできる生徒が揃っており、より高い音楽表現を求めることのできるクラスである。

（3）指導観

グループ練習や調べ学習など、生徒の協働的な活動を多く取り入れ、自ら楽曲の構成や練習の方法を気付くように進める。また、発想記号などを基にして、音楽のイメージを膨らませることで、生徒が高い意識を持って取り組むアンサンブルへ仕上げたい。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～他者と協働し、主体的に課題を解決する能力の育成を目指して～

楽曲がいくつかの要素で構成されていることを学び、グループでの協働的な練習活動を通じて、それぞれの要素について表現を工夫することによって、より高い音楽表現を求めさせる。

5 題材の指導計画

「リコーダー三重奏のためのパルティータ」（I. Allegro）（総時数6時間）

- （1）範奏の鑑賞と個人練習 …… 2時間
- （2）グループ練習による表現の工夫 …… 2時間
- （3）発表および相互評価 …… 2時間（本時1／2）

6 題材の評価規準

	（ア）関心・意欲・態度	（イ）思考・判断・表現	（ウ）技能	（エ）知識・理解
評価の観点	グループ練習中の協働的な活動を通じて、演奏表現の工夫や発表の相互評価に積極的に取り組んでいるか。	楽曲を構成する要素を把握し、それぞれについて工夫したことを発表において適切に表現することができたか。	担当するリコーダーの正しい運指を身に付け、自らのパートと他パートとの関わりを知覚しながら演奏することができたか。	楽譜に書かれている記号や楽曲の構成を理解し、演奏表現に生かすことができたか。

5 本時の計画 (5/6)

(1) 本時の目標

「リコーダー三重奏のためのパルティータ」(I. Allegro)を構成する要素を把握し、それぞれについて工夫した表現をしながら演奏するとともに、グループごとの発表を相互評価しながら鑑賞し、リコーダー三重奏の響きを味わう。

(2) 展開

段階	生徒の学習活動	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 10分	1 チューニングを行った後、「コンコーネ 50 番 No.1」を演奏する 2 「リコーダー三重奏のためのパルティータ」を全員で演奏する 3 演奏について各パート内で話し合う	・正しい姿勢、正しい奏法を意識して、音を合わせる ・グループに分かれ、できるだけお互いに離れて演奏する ・グループごとに反省をし、今回の目標を見出ださせる	・自ら正しい姿勢や正しい奏法を心掛け、周囲の音との調和を確認しているか (A)	・観察 ・観察 ・観察、発言
展開 35分	4 本時の目標の確認をする 主発問：それぞれの要素について、どのような表現が適切かグループで考えよう。 5 楽曲を構成する要素について説明を聞く 6 各グループに分かれて、練習に取り組む 7 グループごとに発表し、練習の成果をお互いに聴き合う 補助発問：それぞれのグループがどのような表現の工夫をしたか、違いを聴き取ろう。	・生徒全員に目標が明確に伝わるようにするとともに、各グループの目標も出させる ・作品全体がいくつかの要素で構成されていることを確認する。 ・教師が各グループを巡視し、練習状況を確認して練習が滞っている場合はアドバイスをし、進むような配慮をする。 ・各グループがお互いの距離をできるだけ取るよう、練習位置に配慮させる ・各グループの発表をワークシートで相互評価する。	・自ら積極的に練習へ取り組むことができたか (A) ・楽曲を構成する要素を意識し、表現を工夫しようとしたことができたか (B) ・他パートとの関わりを聴きながらバランスを考えて演奏することができたか (C) ・積極的に相互評価へ取り組むことができたか (A・D)	・観察、ワークシート ・観察 ・観察 ・観察、ワークシート
整理 10分	8 相互評価シートの完成 9 次時の目標確認	・相互評価シートに各グループの評価を記入した上、感想とともに次時へ向けて自グループのさまざまな課題を記録する。	・進んでシートへ記入を行い、次時への課題を見つけようとしているか (A)	・観察、ワークシート

協議会報告

●科目名【 音楽Ⅰ 】 記録者：森川勝栄（芸術・美術）

	主発問・補助発問	他者との協働	授業全般
よい点	【目標の可視化】 - 目標の要点（曲の構成要素）が明示されていて意識しやすい - 各グループの目標設定が明確で要点が意識されている 【評価活動の充実】 - 他グループの評価を各自が丁寧に行っている - 生徒は他者の表現や感性について言葉でよく評価できている	【主体的・対話的活動の充実】 - それぞれのレベルで目標設定しテーマのあるグループ練習 - 互いに助言⇔修正・練習の連関がある…思考の深まり 【展開に応じた陣形の工夫】 - コロナ禍に対応しつつ、円形で互いの顔が見える配置の工夫 - 教師の指示は的確 →生徒は素早く対応	【主体的な態度】 - 楽しくリラックスしながらも、活動や展開にメリハリがある - 生徒が説明を眼で聴いている 【学習形態】 - 場面に応じた工夫と変化がある全体→グループ→全体 【評価のための客観化】 - 演奏の録音により自グループの評価に役立つ - 評価シート（段階評価・自由記述）の活用
課題	【発問のタイミング】 - グループ目標設定の前に、観点や設定方法が示されていない - 主発問とグループ目標設定のタイミングに意図や工夫が必要 - 補助発問が明確ではなかった 【主発問と活動との連関】 - 主発問にある「曲の構成要素」とグループ目標の設定との連関について説明があればよかった	【課題の共有】 - 他グループとの言語活動があればよかった（練習時・発表時） - 発表時、鑑賞や評価の姿勢や方法、ポイントの指示があればよかった 【グループ活動の陣形】 - グループ内のコミュニケーションや課題の共有を考えると、グループ間の距離が近すぎた	【提示の工夫】 「楽曲の構成要素」のカードに、視覚的な工夫がほしい 【評価方法の明示・工夫】 - 要素をどのように評価するのか - 生徒による総合評価の方法や時間配分等に工夫がほしい - 評価を考えると構成要素を絞ってもよいのではない
改善の手立て	【発問のタイミング】 - 主発問を生かしたグループ目標設定となるよう授業構成を入れ替える 【主発問と活動との連関】 - 主発問を意識し活動できるような、気づきを与える教師の言葉 - 演奏を聴く（鑑賞・評価）際のポイント設定 鑑賞⇔表現 連関と相互作用	【課題の共有】 - パート毎の合同練習等、他グループとの協働を取り入れる - グループの振り返りをさせ、次の活動につなげる - 表現と鑑賞の立場を明確にする 【グループ活動の陣形】 - パート位置の入れ替えや、グループ間の距離をとる等の工夫 学びが深まる活動の工夫	【提示の工夫】 - 生徒への意識付けや興味・関心をひくカード作成の工夫（カードや文字のサイズ、色分け等）と提示のタイミング 【評価方法の明示・工夫】 - 構成要素の絞り込み - 評価の重みづけにより、表現と鑑賞のポイントを意識付け 効果的な時間配分と意識付け
指導・助言	● 生徒の音楽的な能力の高さに驚く。 ● 生徒の主体性に教師が頼りすぎているところも。もう少し深い学びにつなげられるのでは。 【主発問のポイント】 ・ 題材目標を達成するための主発問を意識する ・ 音楽を形づくる要素はたくさんあるが、一つの題材で扱う要素は3つ程度にとどめる 【評価のポイント】 ・ それぞれのグループ目標に照らした評価…音は時間とともに消えていくので、その都度アドバイス ・ 教師による評価の観点の絞り込み…生徒の本時のゴールを意識した評価の観点と方法を考える		

令和2年度校内授業研究会（公開）を振り返る

●参加者の内訳（実習生をのぞく）

校内		校外	
授業者	1	指導・助言者	1
全体進行・記録者	1	参観者	1
ファシリテーター	3	小計	2
参観者	9		
小計	14	計	16

校内		校外	
授業者	1	指導・助言者	1
全体進行・記録者	1	参観者	2
ファシリテーター	2	小計	3
参観者	8		
小計	12	計	15

校内		校外	
授業者	1	指導・助言者	1
全体進行・記録者	1	参観者	2
ファシリテーター	3	小計	3
参観者	9		
小計	14	計	17

校内		校外	
授業者	1	指導・助言者	1
全体進行・記録者	1	参観者	0
ファシリテーター	2	小計	1
参観者	10		
小計	14	計	15

●「振り返り」（アンケート）の結果1

※回答は校内参加者のみ

◎立場からみた回答数

立 場	回答数	回答率
授業者	3	75%
全体進行・記録者	3	75%
ファシリテーター	9	90%
参観者	22	61%

◎ワークショップの評価

大変よかった	18
よかった	19
あまりよくなかった	0
よくなかった	0

◎授業/参観した教科からみた回答数

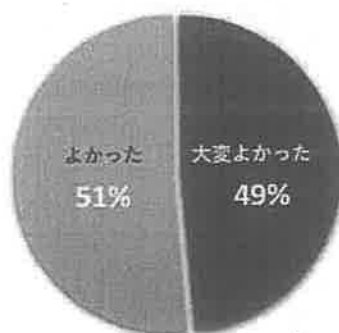
教 科	回答数	回答率
日本史B	11	79%
数学A	10	83%
物理	6	43%
音楽I	9	90%

◎授業研究会全般の評価

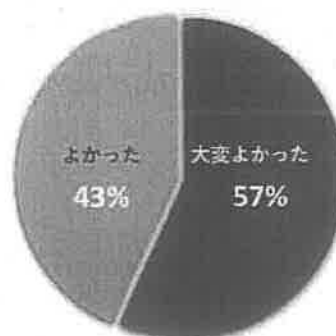
大変よかった	21
よかった	16
あまりよくなかった	0
よくなかった	0

↑
対象者数

ワークショップの評価



授業研究会全般の評価



令和2年度校内授業研究会（公開）を振り返る

●「振り返り」（アンケート）の結果2

◎ワークショップの評価理由 ※太字ゴシックは肯定的な理由、下線部は課題を表している。

「大変よかった」と回答した人の記述	「よかった」と回答した人の記述
参加の際の視点が明確化されていたため、意見を共有しやすかった。（日本史B）	課題と改善の手立てがリンクしている（音楽I）
他教科の先生と協働することで、発問やグループ活動、授業に対する新たな視点を学ぶことができた。（日本史B）	自由な感想レベルの話が「主発問」が強調されすぎてできない。（音楽I）
主発問・補助発問について、他者との協働といった視点で議論を深めることができた（日本史B）	様々な観点から授業分析ができた。（日本史B）
秋田高校の生徒に対して、主発問の是非とそれに伴ってどのような協働が引き起こされたかという研究テーマに焦点を当てて議論することができた。議論の中心が焦点化された話題であったので、自己の授業を振り返りながら活動することができた。（数学A）	他教科の先生方の視点を聞くことができて良かったと感じる。自分の考えを深めたり、見つめ直すことができた。また、自分の授業に置き換えて考えたときに、生徒の意見や考えを拾うことが十分にできない点や説明が多いなど、自らの課題を再認識した。（物理）
個々の意見を視覚的に結びつけて改善点を考えることができ、ただ口頭で話し合うだけよりも自分の心に残りました。（数学A）	他教科の先生方と意見を交わせたから（数学A）
少人数のグループだったので、個々の意見が共有しやすかったと思う（日本史B）	活発な意見交換がなされていた。（音楽I）
教科を絞ったことで、他教科の先生方にも参加していただき、他教科で重視されている視点などが非常に参考になった。（数学A）	教科の特性を生かしながら、教科を越えて建設的な意見交換ができたため。（音楽I）
授業を見る視点が揃えられていたため、協議のポイントが絞られていたから。（数学A）	付箋紙を一人ずつ順番に説明しながら貼る方式をとったが、同様意見がある場合はその場ですぐに付箋紙を近くに貼り付ける方式にしていれば、協議時間をより多く確保できたのではないかと・・・とファシリテーターとして事後に反省した。（音楽I）
マトリクスによるグループワークは効率的でみなさんの意見が、教科を超え改善提案に向かう様子が見られた。（音楽I）	マトリクス法は今までも何度か経験したが、2×2が多く、今回の3×3はとてもやりやすかった。自分たちのワークショップの出来がまだなので「大変」ではなくただの「よかった」評価。（数学A）
グループだけでなく全体で参加者全員の意見を共有できる（日本史B）	単に良し悪しではなく、踏み込んだ話し合いができたからです。（数学A〔参観者〕）
活発に意見交換ができた（日本史B）	マトリクスを使用して、良かった点・改善点を可視化できたこと、人数的にも適切で話しやすかったことなど、学ぶ点が多かった。欲を言えばもう少し話し合う時間が長ければなお深まりがあったかと思う。（物理〔参観者〕）
全体の進行役（教科主任）との役割分担さえできれば、協議会とワークショップを分けることができるので良かったです。また、小グループにしてできたことがまた良かったと思っています。（数学A）	いつもは参観しない他教科の授業について、教科を超えて話し合いができたため、非常に有意義だった。グループでのまとめの時間が十分に取れなかったため、進め方にはもう工夫必要かと感じた。（音楽I〔参観者〕）
多くの先生方にご参加いただき、2グループでの協議によって多角的な視点から授業へのご意見をいただくことができた（音楽I）	議論の方向性が定まっており、効果的な話し合いができた。時間が短かったのが残念。（物理〔ファシリテーター〕）
和気藹々とした雰囲気の中で、分かりやすく課題解決への道筋が見えた。（音楽I）	他教科の授業（ねらい、指導法や評価の観点）にふれるよい機会であった（日本史B〔参観者〕）
マトリクスが3×3で意見を出しやすく、まとめやすい。課題を改善する方策を合わせて提案できるのが良い。（日本史B）	付箋紙法でやると、可視化できてとても良いのだが、ある程度急がないと時間が足りなくなる。（物理）
グループ化によって少人数で行っていただいたことで、様々な角度からたくさんのご意見を頂戴することができました。構造化についても、3つの班それぞれの見方が表れていて、今後の授業改善の参考になることがたくさんありました。ありがとうございました。（日本史B）	他教科の先生方と意見を交換できたことで、異なる視点を得られたと同時に、基本的に留意すべき点は教科に関係なく共通していると再認識できた。（物理）
可視化して良い点、改善点を議論できたこと。5人という適正な人数でワークショップができたこと。（日本史B）	各自、自由に話し合いができる時間が十分にあった（物理）
授業参観者の観点到に違いがあり、それぞれの見方や考え方を共有することができた。（数学A）	

令和2年度校内授業研究会（公開）を振り返る

●「振り返り」（アンケート）の結果3

◎授業改善への課題や方策

日本史B	グループワークの際の支援の仕方、コロナ禍の中での適切なグループ編成、史料への着目のさせ方などは、教科の枠を超えて、様々な実験的な試みを通して考えていかなければならないと感じた。	協働学習を効果的に行うためのグループ編成のあり方→生徒の性格や人間関係を考慮する。 資料の読み方のポイントがつかめない生徒がいる→資料の読み方についても指導が必要
	①本時のねらいを達成するための、主発問のことば ②グループ活動での主体性をどのように引き出すか 今回の様に教科をしばって開催した方が、他教科の先生方も参加しやすく、貴重なご意見がいただける。自分の教科では見えなかった着眼点でアドバイスもらえるのがとてもよかった。	主発問と補助発問は授業の質を高めていく有効な手立てだと思いました。ただ、その内容が十分ではなく、「質問の焦点化」「質問の可視化」などのご指摘をいただきました。その点を反省しながら、普段の授業においても、目標に到達する質問のあり方を考えていきたいと思います。
	授業の焦点化（中心となる内容への時間配分・重点化）	協働を行う仕掛けやスタイルのヒントを広く求めることが必要
	具体的で限定的な資料を元にして生徒に考察させることで、生徒のモチベーションが喚起されることを改めて感じた。また、グループワークの結果の示し方をどう工夫するか、さらに考えたいと思う。	生徒に主発問をフォーカスさせ続ける工夫 主発問設定の難しさ 主発問の設定は具体的に。授業内容は盛り込みすぎない。
	協働をさせる場合の思考の共有のさせ方について、グループ内での共有はしやすいが、各グループ間やクラス全体での共有は簡単ではないので工夫が必要だと感じた。 発問の選定	話し合いの中で重点が置かれていた、協働活動に関しては自分にもあてはまることとして振り返ることができました。グループ学習の形態をとったときには、集団で取り組むことの意義を考慮した発問をする必要があるのだと強く思いました。
数学A	【グループワークの進め方】①役割を決める②グループ間の意見交換③発言の共有 的確なタイミングでの発問、生徒の声の拾い方。	個の学習時間、個人追究の時間の確保。反転授業のような方法も考えていく必要がある。 今回は、チャレンジする授業ということで、難しい内容を選択した授業でしたが、生徒に考えさせる部分や『深い学び』を目指すには、1時間の中で終わらせることはなかなかできないと言う課題も浮かび上がりました。反省では、ここで終わらせないことが大切という意見があったように、毎回の授業の流れの中で、目指す『思考』をかんがえていかなければならないと感じました。
	生徒間の意見の共有方法についてしっかりと検討していく必要があると感じた。質の高い題材であったため生徒個人で活動する時間が多く、意見を共有してさらに深めるということの大切さを実感した。	
	ICTを活用することで、生徒の興味関心や授業の指示がわかりやすくなることを実感できた。	
物理	説明しすぎることなく、生徒に深く考えさせるために、教材・教具の選定や視聴覚教材の利用を工夫したい。	本校生徒の持つ力を考えると、生徒たちが議論し合い、生徒自身で気づいて答えを導くような授業形態が理想と考えるが、その前提としての基礎知識の定着や共通理解をいかに効率よく図っていくか、またその重要性に改めて気づかされた。
	研究授業であれ普段の授業であれ、各活動の意義、生徒への指示を明確にする必要がある。	授業者の頑張りを知っている分、なかなか課題は言いにくいのかとも思うが、個人的には、本校の授業改善という大きな目標のため、もっと忌憚ない意見を言い合う雰囲気・言い合える雰囲気を作れるようになりたい。
	思考を活発にするために、発問の具体性と抽象性の度合いをどうするか、が大切。	
音楽I	考えるための前提条件を明確に指示することの必要性	
	到達目標と評価の一体化の重要性。 評価の観点を絞ることで、授業のねらいが焦点化され、見通しをもった学習の支援が可能になる。	協働活動には課題の共有（報告合わせ）が大切であるから、主発問の提示とグループの活動目標設定のタイミングを工夫すると、より焦点を絞った活動につながる。
	演奏組と観賞組に分けて授業展開する発想は出てなかったもので、アイデアとは集まって話すことで生まれること実感した。	主発問の内容だけでなく、タイミングによっても、本時のねらいの到達度に差が生じる。 教師の評価、生徒同士の相互評価の精選
	主発問のタイミングについて。生徒に対して効果的に提示するにはどうしたらいいかは、各教科で共通の課題だと感じた。また、評価の観点については、欲張りすぎないのが大事というのもよく分かった。参考にしたい。	授業のねらいを絞り込み、盛り込みすぎないこと。 教材の取り扱い方と工夫。 ・生徒に目標を出させる際の、本時の目標との関係性 ・演奏発表を相互評価する項目の絞り込み

令和2年度校内授業研究会（公開）を振り返る

●「振り返り」（アンケート）の結果4

◎授業研究会全般の評価理由 ※太字ゴシックは肯定的な理由、下線部は課題を表している。

「大変よかった」と回答した人の記述	「よかった」と回答した人の記述
今年から形態が変わり、他教科の授業を参観することができたので、幅広い、かつ共通の視点から協議できて非常に有意義だった。今年は芸術の参観をしたが、非常に参考になったので、他教科の先生方も実技教科の参観をした方がいいと思う。	例年と異なり、他教科の授業を参観できる機会があるのは大変意義深いことだったと感じる。
授業者のねらいや思いがよく理解できたから。	ワークショップが効果的だったから。
準備されたワークショップの形、授業そのものも良かったが、数学の授業では、外部からの参加者（特に中学校の先生）や教育実習生から、我々とは違った視点からの意見をもらうことができたことが大変有意義であった。	他教科の授業を参観できたから
準備段階から教科全体で議論し合う機会が設定されており、教科として授業改善への意識の向上が図られたように感じる。	授業者の先生のおかげで、学校全体で課題を共有し、深い学びにつながる発問の工夫について考える有意義な機会になりました。
同じ教科の授業を、時には生徒の視点で、時には他教科の視点で参観し、協議に臨むことができた。自身の取り組みの振り返りにつながった。	もう少し時間を多く確保できれば、より良かった。
生徒の学びを深めるためのアプローチ方法を、教科をこえて考える良い機会だと感じた。	話し合う時間から全体で共有し終わるまでがどうしても長くなってしまい、授業者からのお話しや最後の指導助言にあまり時間をかけられないのが残念だと感じる。
複数教科の先生方が参加することで様々な観点で授業を評価することができた。	授業者が一生懸命に準備を行い、授業に真摯に向き合っていた点はとても良かった。外部の先生や他教科からの視点が得られるのも良かった。授業を絞って集中して授業の研究に取り組む時間を確保しているのも良かった。
いい題材、いい授業が見られてとても楽しかった。いつもよりも元気に活動している生徒の様子を見てみると、自分も頑張らなければと思った。ワークショップ・検討会についても多くの参考になる意見が飛び交い、その一つ一つの視点を通して自己の授業を振り返るいい機会になった。	指導主事訪問の事業参観もそうだったが、昨年までと違い、他教科の授業がしっかりと見れたことは非常にためになった。内容は分からなくても、子どもたちの乗せ方や、授業内での知識と知識のつながり、前時や次時とのつながりなど本当にためになる。授業者は大変だが、その分たくさんの人に見てもらい多角的に意見がもらえることは非常に有効かと思う。次回以降もこの形式でお願いしたい。
研究会を通して1人では持つことの出来ない授業への視点を確認できたので、非常に有意義な時間だったと思います。	中学校の先生との協議もあり、参考になりました。
他教科の方々の言葉から普段気付かない別の視点が得られたと感じる	付箋ワークショップ（特にマトリックスを用いて）は意見を出しやすく、集約しやすい。
授業改善に向けてさまざまな視点が得られたので。	滞りなく行われていたと思う。
・外部の指導助言者に関わっていただいたこと。 ・教科をこえた授業参観、協議により授業改善のための意見交流が深まったこと。 ・協議会の全体進行、ファシリテーターの方向合わせにより、プロセスやゴールを全体で共有できたこと。	前年度までと異なり、他教科の授業を参観できたのは有効であったと思う。
授業参観でき勉強になった（学ぶことが多かった）	科内で指導案について協議して、授業、さらに協議という流れがあって、改善につながると思う。
授業改善をしなくては行けないというモチベーションにつながったから	他教科の観点を聞くことができて有意義であった。
事前に職員が同じ方向を向くと言うことがこのような『公開授業』等での研究授業では大切ですので、役割を事前に付けて、協議していたことが良かったと思います。	学校外の先生の参観や他教科の先生の参観もあり、多様な視点で授業を評価してもらうことができたから。
同じ教科の先生が学校にいないため、授業が独断的になりやすい所、多数の他教科の先生方にアドバイスをいただくことができた	
他教科の授業をひとこま通して見ることで、授業の構成が明確化され参考になった。	
実施する教科を絞ることで、他教科の授業を参観できるのは大変良い。	
教科を超えた研究会は有意義であると思います。様々な視点から意見を交換することは、私たちの資質向上につながると 생각합니다。	
学校全体ですべての先生が主役となって行っている。	
教科会で授業内容や指導案を協議し、授業の目標や1時間の流れを把握した上で参観することができた。ワークショップでも論点がずれることなく改善点などを共有することができた。	

令和2年度校内授業研究会（公開）を振り返る

●振り返り（アンケート）の結果5

◎感想・自身の考えの変容

日本史B	様々な観点が提示されたのでよかった。考えの変容は特に起こらなかった。 発問の仕方によって生徒の反応は異なる、というのは当然であるが、あらためてそれを実感するとともに、自らの発問のあり方を見直すことができた。 史料の提示の仕方を考えさせられた。特に、地元の史料など、生徒にとって身近なものを提示することで関心を高める効果について、改めて認識させられた。 生徒が活躍する場を設定する大切さを再認識できた。 自分の授業をどう改善していくか大変ヒントになりました。 今までよりも何を身に付けさせるかを焦点化させるようにしたい。 他教科であっても、共通している事項があり、参考になった。 発問をどのような言葉を使って行かうか、どうシンプルに聞かうかを考えた 普段の授業とは異なる形式を実践することで、新たな発想も生まれるし日常的な授業に応用できる気づきがあった。 授業を参観する際の視点や見方が変わった	指導案作成等において個別に指導主事より指導をいただくなど、本校においては今までにない方法での研究会実施でした。その授業担当として本研究会に参加できたことは大変貴重な経験となりました。森川先生をはじめとする企画研修部の先生方に感謝いたします。今回のご指摘やご指導を次回以降の授業に生かしていきます。 【教科担当者として】 10月の指導主事訪問、11月の本研究会、いずれにおいても地歴科の授業が割り当てとなりました。地歴科教員の資質向上につながる機会ではありましたが、他教科の授業を参観して協議するという機会が地歴科にはありませんでした。仕方のないことではありますが、今後同じようなケースが生じた場合、校内授業研究会においては担当教科を変更するなど、柔軟な対応が可能であればご検討いただきたいと思います。 【授業者として】 指導案作成から授業実施までのスケジュールが分かりづらかったところがあります。どのように校外指導担当者に連絡・案内があり、指導担当との段階でやりとりを始めるのか（お願いするの）、そのあたりが理解できていませんでした。企画研修部と授業者との打ち合わせも必要かもしれません。
数学A	『深い学び』を目指すための『主発問』が今回のメインテーマであり、その後の生徒たちの『協働』が思考を深めるためのポイントでしたが、やはり、グループを作ることにより、その数だけの『小さな教室』ができてしまうため、『意見や考え方』の吸い上げが大変になることを改めて感じました。特に、数学の場合、深く考えるためには、『時間』が必要となります。その時間を省略するとどうしても、『ロート法』のように、授業者が目指す結果に導くための『ヒント』を出すことになってしまうことがちょっと残念です。そして、違う思考をしているグループは、中々『ヒント』に従わずに、その考えを通そうとしてしまう（ある意味こっちが正しい）傾向があり、授業として成立しない状況を生んでしまうこともあるからです。 普段の授業ではなく実験的な授業を実践することができよかった。今回だけでなく、継続していくことが今後の財産となったと思う。グループワークの難しさを実感する結果となったが、改善点を今後の授業に生かしたい。	今回の研究会を通して、自身の授業のあり方を再確認しました。主発問の提示の仕方はどうであるか、授業全体を通して主発問の解決に繋がるように誘導できているのか、まだまだ考えが及んでいない部分が改めて明らかになったと感じています。 生徒を動かすこと、生徒の考えを引き出すことのむずかしさを実感した。また、生徒の思考過程を残して共有するということの大切さを実感することができた。 授業で扱う題材やIT機器の使用法について、特に大きな刺激を受けた。 生徒の発表を可視化できるICTの活用について参考にしたいと思った。 いい題材の選び方など参考になりました。 ICTの活用について考え方が広がった。 授業者は研究授業の準備が大変だったと思うが、生徒の興味関心を引き出すネタ作りや工夫が見られ、ICTなどを活用して効果的に授業を進めていた。協議会でも他教科の先生の意見などを聞くことで新しい考え方を学ぶことができた。
物理	自分自身の反省も含めて、研究授業は非常に難しいし、本校生徒はできるのいろいろなことを教えたいたい思いもあり、つい内容的に盛り込みすぎる傾向があるが、消化するために急ぎすぎると、最も大事な、力を込めて生徒に伝える部分が薄くなったりしてしまい、本末転倒になることがままある。この授業で何が大事なことを日々見極め、生徒のリアルな様子を見ながら、しっかりと授業をつくっていききたい。何より、秋高で授業できるということは、当たり前なことではなくとても恵まれていることだという幸運さをもっと意識しながら日々授業にあたりたい。 年2度実施の授業研究会のうち、1回目は各教科で、2回目は他教科も交えた授業参観というバランスでよいと思う。	多くの先生方が、生徒の主体的な活動や学びの場を工夫を凝らして作っていると感じた。生徒自身が考えを深めるための発問の設定や思考の過程をどう工夫していくかという点は、自分はまだまだだと感じている。普段から多く授業を参観して、生徒との関わり方や授業展開の工夫を学んでいきたい。 他教科の先生とも議論したことで、1つの授業を通じて広く課題意識を持ち、今後の授業改善の方向性を確認することができた。 生徒に内容を全てクリアに伝えることが、生徒の思考を活発にさせるとは限らないのだと（これまでたまに思うが）思った。 到達目標に対してより意識していく必要性を感じた
音楽I	授業改善強化期間の中盤で、改めて生徒の思考を揺さぶる発問の意義を感じました。個人の内言を外言化する際に協働は不可欠です。その方策の多様性を模索していきたいと思えます。 他教科の授業を参観することで、自身の固定概念のようなものにとらわれない視点が生まれたと思う。 補助発問については、指導案に具体的に記入する必要はないのではないかと考えた。その時々生徒の様子や反応を観察することで、効果的な発問が生まれると思う。 日々忙しく、ややもすれば立ち止まって授業のあり方を見つめることが疎かになりがちです。学校全体で授業改善のための時間を共有できたことは貴重です。他教科の授業参観は新鮮で、グループワークを通して自身の授業改善への気付きも得られました。今後、よりよい研究会になっていくことを期待します。 研究会で協議する内容を絞ることで議論が深まる	授業1コマのねらいや到達目標は、盛り込み過ぎずに焦点化する方が、生徒も取り組みやすいし、指導者も指導・評価しやすい。 多くの先生方からのご意見やアドバイスから、今まで自分では気づくことのできなかった授業の改善点を発見することができ、今後授業へ直接生かすことのできる多数のアイデアをいただき、大変勉強になりました。 秋田高校の生徒の能力は非常に高いということが改めて分かった。求めるレベルが高くてもしっかり対応でき、それに応えようと努力できる生徒が多い。こちらで沢山工夫することで、生徒の能力をどんどん伸ばして行きたい。 生徒が演奏を通してよりよい授業を作り上げようとしている姿に感動した。

令和2年度校内授業研究会（公開）を振り返る

●「振り返り」（アンケート）の結果6

◎自身の授業実践で変えていきたいこと

日本史B	焦点化。協働的な授業においては、思い切って授業内容を精選する。	板書、プロジェクターでの投影、生徒の発言等をどうまとめるか、より良い方法を考えていきたい。
	生徒が難しい史料を合理的に解釈し、考察に活用できていた。日々の指導の表れであると感じた。史料の活用については積み重ねを意識して、毎日の授業で実践していく。	主発問、補助発問をどう組み込んでいくか。1つつ実践につなげていきたい。
	発表や板書、ホワイトボードなど、生徒が考えを表現する場面を意図的に増やしていきたい。グループ活動で学びを深める単元を増やしていきたい。	わかりやすい問いを意識することから始めたい
	史料(資料)を活用していきたい	史料の活用。グループワークの実践。 身につける力の焦点化、そこに向かわせる活動の工夫 資料の活用や提示の仕方、情報共有のあり方など
数学A	授業で扱う題材について、追究していきたい。また、生徒の発表のさせ方について、他の生徒との「共有」という視点をもって検討・指導していきたい。	『主発問』という意味では、発問までに『どのような内容であっても』興味をもたせることが重要だと思っていますので、まずは、内容に関心を持たせていきたいと考えています。
	最も意識したいのは主発問の工夫です。これまでの授業では主発問が曖昧な場面が多く、生徒の主体的な学びを促進することには行き着いていなかったように感じるので、教材研究の段階から深く考えていきたいと思っています。	ICTの活用と発問の工夫 生徒の考えの共有方法 グループ活動にする意義がある授業を展開したい。
	発問の仕方に工夫を入れていきたい。生徒を動かし、学びに向かわせるための仕掛けについて少しでも練って、まとめていきたいと思う。	授業での指示の仕方や生徒の動かし方など参考になることが多かったので、今後の授業に取り入れていきたい。
	生徒への発問の仕方を考える必要がある。教材研究にもっと時間をかけて真剣に取り組む必要がある。	焦点を絞った発問、ヒントのタイミング、ICTの活用（←来年度に向けて）
物理	繰り返しになるが、この授業で何が大事なことなのかを日々見極め、生徒のリアルな様子を見ながら、しっかりと授業をつくっていききたい。本校生徒のできる子は本当によくできるので、その子たちを主体にしていけば授業の進行はスムーズだが、文武両道を標榜するうちだからこそ、できる子たち主導ではなく、できない子たちにも授業で理解させることをもっと意識していきたい。楽しいだけの授業ではなく、楽しくてしかもしっかりと生徒の力になる授業、授業と授業の連関性、知識と知識のつながりから知恵を導くような授業にトライしていきたい。	生徒に気づかせる場面を多くすること。 到達目標に対してより意識していく必要性を感じた 教材の活用や提示方法の工夫や、説明するだけでなく、生徒自身にしっかりと考えさせることを工夫しながら取り組んでいきたい。 定期的に新しい試みを取り入れていく。最近さぼりがちだったと反省している。 深い学びに導くのはもちろんのこと、その前提としての基礎の定着を効果的に図る工夫をしていきたい。
	授業のねらいを焦点化し、その時間の核に近づくため、どんな仕掛けを準備するかを意識して授業づくりをしていきたいと思っています。	指導内容・学習活動によっては、本時の目標を指導者主導で提示するより、生徒自身に主体的に設定させる方が能動的になると学んだので、TP0により実践したい。
	前時の振り返り、本時の目標の提示、本時の振り返りの流れの工夫。授業での取り組みや評価の焦点化。	生徒が活動を通して学びを深めていくための効果的な授業構成と、魅力ある主発問の探究
	教材をいかに活用して生徒に考えさせる授業をするか、工夫をしていきたい。	・より生徒の視点に立った目標設定 ・生徒を伸ばす曲目の選定
音楽I	目標と評価を一体化させながら、かつ欲張らないようにしたい	生徒の様子をじっくり観察しようと思う。 一方通行な授業でなく取り組みたい。

令和2年度 秋田高校校内授業研究会（公開） 当日の様子

●研究授業風景



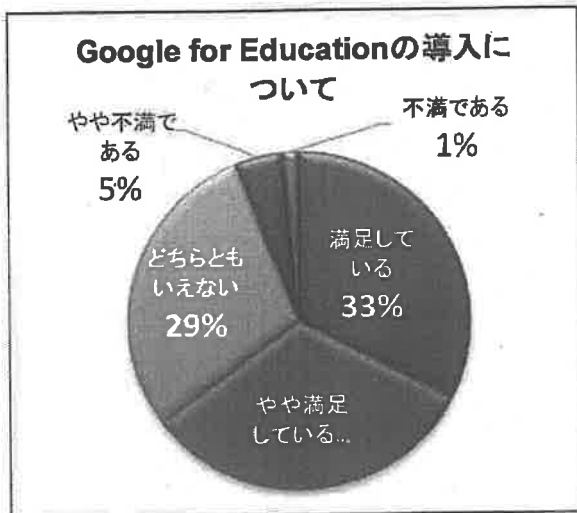
●研究協議風景



Google for Education 意識調査結果概要

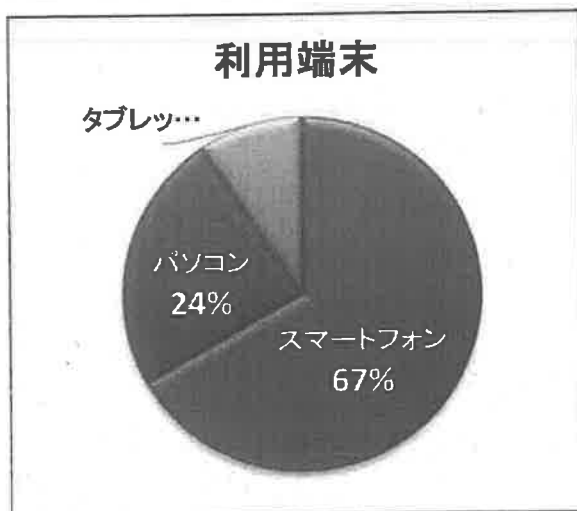
■Google for Educationの導入について

満足している	137
やや満足している	135
どちらともいえない	122
やや不満である	19
不満である	6



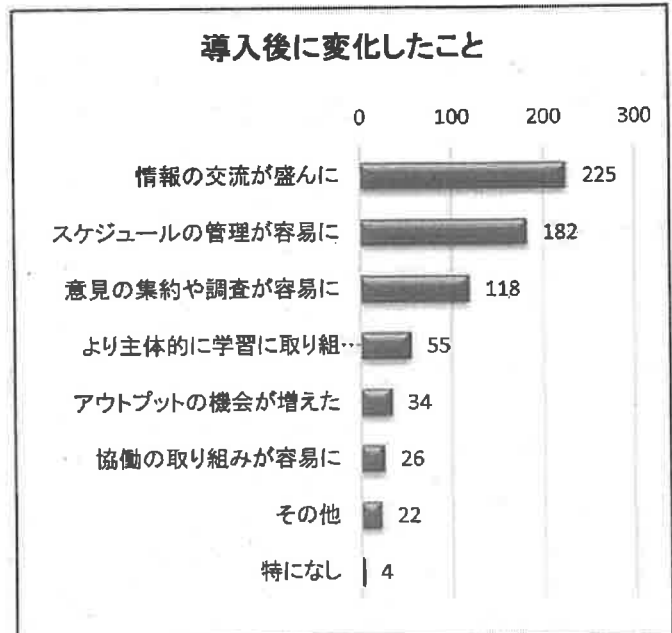
■利用端末

スマートフォン	380
パソコン	136
タブレット	53



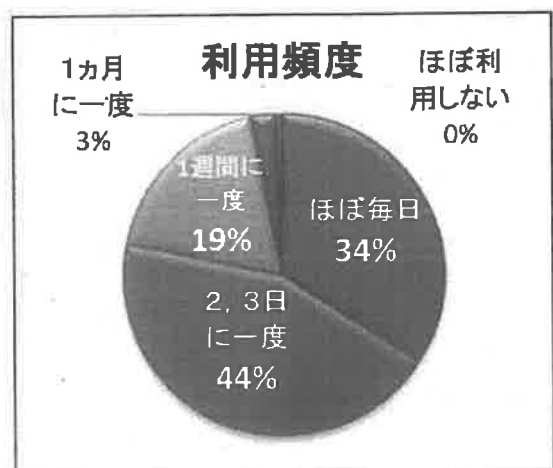
■導入後に变化したこと

情報の交流が盛んに	225
スケジュールの管理が容易に	182
意見の集約や調査が容易に	118
より主体的に学習に取り組むように	55
アウトプットの機会が増えた	34
協働の取り組みが容易に	26
その他	22
特になし	4



■利用頻度

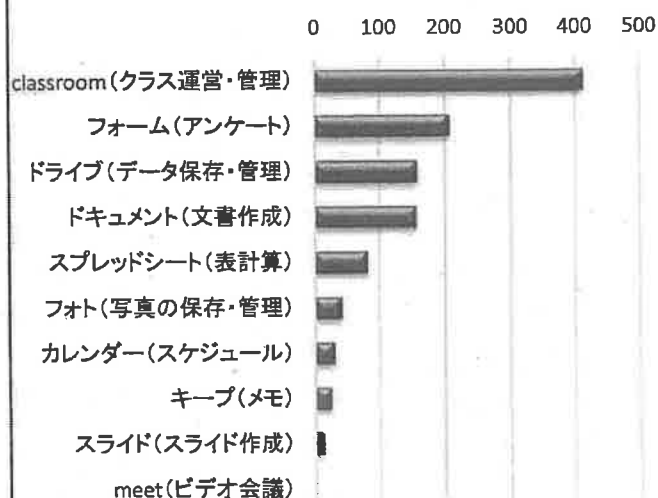
ほぼ毎日	143
2, 3日に一度	185
1週間に一度	78
1か月に一度	11
ほぼ利用しない	2



■ 利用アプリ(複数回答)

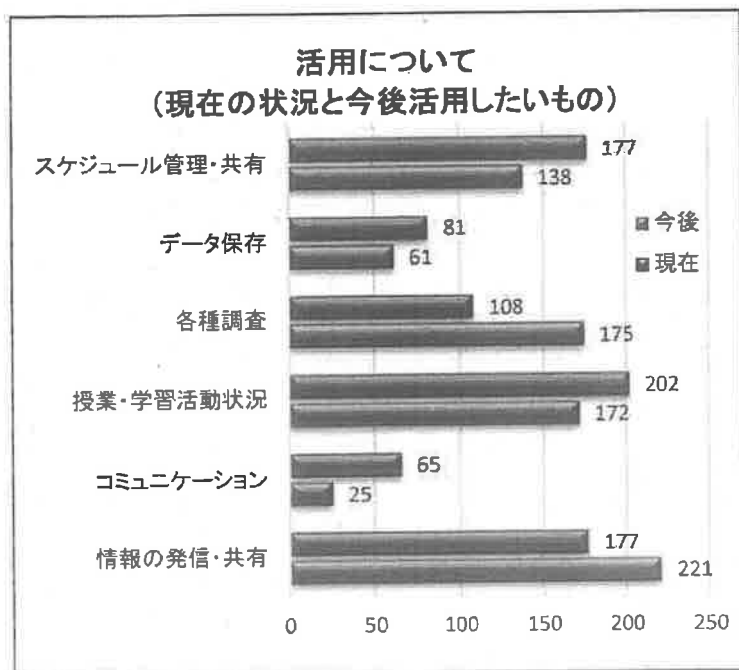
classroom(クラス運営・管理)	413
フォーム(アンケート)	207
ドライブ(データ保存・管理)	157
ドキュメント(文書作成)	156
スプレッドシート(表計算)	81
フォト(写真の保存・管理)	41
カレンダー(スケジュール)	30
キープ(メモ)	25
スライド(スライド作成)	13
meet(ビデオ会議)	1

よく利用するアプリ



■ 活用について(現在の状況と今後活用したいもの)

	現在	今後
情報の発信・共有	221	177
コミュニケーション	25	65
授業・学習活動状況	172	202
各種調査	175	108
データ保存	61	81
スケジュール管理・共有	138	177



『宋史』列伝の人物とその周辺 ～五代・北宋初期を中心に～

教諭 坂本 公正

はじめに

『宋史』の訓読を2018年7月から行っている。『宋史』とは中国二十四史の一つであり、総巻数は全496巻に及ぶが、今回は列伝部分の巻253～巻255を扱う。昨年度は列伝の人物評が、かなりの辛辣さを伴って記述されていることを中心に述べた。それに続き、今年度は個人の伝に登場する周辺の人たちに焦点を当て、そこから見えてくるものをまとめてみることにしたい。

時代について

唐滅亡から五代王朝・北宋初期に至るまでの約100年間とする。以下にその間の王朝を列記する。

唐滅亡(907)→後梁(907～923)→後唐(923～936)→後晋(936～947)→後漢(947～950)

→後周(950～960)→北宋成立(960～1125)

この混乱に終止符を打ったのは趙匡胤(927～976)である。960年に宋を建国し、太祖と呼ばれている。

今年度扱った『宋史』列伝人物一覧

- ①馮繼業(926～977) ②王承美(?～1012) ③李繼周(942～1009) ④孫行友(901～1009)
⑤侯益(885～965) ⑤'孫延広(941～991) ⑥張從恩(897～966) ⑦扈彦呵(885～960)
⑧薛懷讓(891～960) ⑨趙贊(922～977) ⑩李繼勲(914～976) ⑪藥元福(883～960)
⑫趙昇(908～965) ⑬郭崇(907～965) ⑭楊廷璋(911～971) ⑮宋僊(925～989)

昨年度は21人、今年度は15人で、これに子や孫の伝も合わせると50人を数える。2年間で約50名を読み進めることができている。

人物紹介 その1 侯益の孫 延広 ～乳母による救命と忠義あふれる臨終の言葉～

侯益(⑤)は後唐の莊宗に忠誠を誓い、後唐の滅亡後、後晋・後漢と渡り歩き、北宋の太祖とは旧知の間柄で優遇された。その侯益の孫にあたるのが延広(⑤')である。まずはこの人物を論じてみたい。

延広が幼い頃、景崇の難と呼ばれる戦乱があり、一族が攻め込まれた。その際に乳母である劉氏(列伝には本名なし)が、侵入してきた相手に自分の子を延広と偽って差し出した。延広はからくも侯益のもとに送られ一命を取りとめることになる。自分の子を犠牲にした乳母の心中はいかばかりであつたろうか。その後、延広は勇敢な若者に成長し、異民族からも恐れられる存在となる。延広は30代で病を得ながらも異民族の侵入の度に病をおして出陣する日々を送る。50歳でついに危篤状態になり、近くの武將に次のように言う。

「延広自度必不起家世受国恩。今日得死所、但恨未立尺寸功以報上耳。」(「延広自ら度るに必ずしも家世を起てずして国恩を受く。今日死所を得て、但だ未だ尺寸の功を立て以て上に報ぜざるを恨むのみ。」と。)

試訳：「私延広は自らを顧みるに必ずしも家を盛り立てることができず、それなのに国家から恩を受けてきた。今日、まもなく死を迎えるにあたって少しの功績も立てないうちに(自らの死を)皇帝に報告する

だけになってしまったのが恨めしい。」

これを聞いた北宋の皇帝は涙を流し、死後手厚く葬儀したとある。この時代の武将はともすれば自分の欲望のままに生きて他者を顧みないのが当たり前といった風潮がある中で、延広のような生き方は、私にとって新鮮であった。ただ延広の忠義をたたえる気持ちもある一方で、延広が亡くなった年が991年であることを根拠に別の見方も示したい。991年は北宋建国から30年が経過しており、一般的に30年経てば政権は安定してくる。こうした中で家臣も国家に対しての帰属意識が少しずつ芽生えてきていたのではないか。忠義の士は安定した時代に登場するものかもしれない。次に乳母の存在も忘れ難い。推測の域を免れないが、延広は成人するまでに一度は自らの危機に直面した生い立ちを周辺から側聞していたのではないか。そして意識の有無にかかわらず、自分の人生の意義、宿命といったものを探し求めていたのかもしれない。余談だが授業で延広の臨終のくだりを訓読文で生徒に示してみた。このうち何人かでも延広の思いを汲み取ってくれたら嬉しい。

人物紹介 その2 趙賛 ～権力者によって神童と称された賢帥～

趙賛（⑨）は父が後唐の明宗の娘と婚姻して生まれた子であり、当時の名門の出である。幼少時より神童の誉れが高かった。『宋史』には次のように書かれている。

暇日、因遍閱諸孫數十人、目賛曰、「是兒令器也。」。賛七歳誦書二十七卷、応神童挙。（暇日、因りて遍く諸孫數十人を閲し、賛を目して曰く、「是の兒令器なり。」と。賛七歳にして書を誦すること二十七卷、神童として挙に応ず。）

試訳：ある退屈な時、明宗はじっくりと数十人の孫を見定めていたところ、趙賛をじっと見て「この子は立派な子である。」と言った。趙賛は7歳で27巻もの書物を暗誦し、神童として（後に）科挙にも合格した。

一見するとよくある神童の挿話ではある。ここでは数十人もの対象から趙賛を見抜いた明宗の言動に注目したい。教育の現場にいて痛感するのは、生徒の能力を見出すことであり、まして幼児の段階でそれを為すことは至難の業である。

其為政雖無異政、而吏民畏服、亦近代賢帥也。（其の政を為すや異跡無しと雖も、而れども吏民畏れ服し、亦近代の賢帥なり。）

試訳：その政治は優れた業績こそないが、役人も庶民も（彼を）敬服し、また当世きっての優れた軍師であった。

趙賛の生涯は異民族の契丹との侵略への対応で明け暮れたといっても過言ではない。ある時には流れ矢に当たり負傷しながらも闘い抜いた経験もしている。列伝には「賢帥」と記されているが、趙賛は単なる頭脳派の人物というより、武人としての行動が伴った人物であったことが看取できる。こうした優れた人物の影にその才能を見抜いた明宗の存在があったことを理解しておきたいものだ。

人物紹介 その3 郭崇 ～次女が皇帝婦人に。死後高まる評価～

郭崇（⑬）は広順元年（951）、後周の同平章事（宰相）となった人物であり、物静かで策略に長けていた。郭崇自身は乾徳3年（965）に亡くなっているが死後60年が経って尚書令と中書令の位が与えられている。役職は当人が優れた業績を挙げ、それにより与えられるのが一般的である。しかし郭崇の場合、娘が北宋の仁宗の皇后となったことが大きく影響し昇進（？）するという事例になっている。宋王朝としては先人を讃えることで磐石な国家づくりを目指したものだっただろうか。いずれにしろ当人の意志を越えたところに人々の評価というものがどうやら存在するようである。

人物紹介 その4 宋偃 ～一族の相統争いを予見した長女～

宋偃(⑮)は母が後唐の莊宗の娘、妻が後漢の漢祖の娘という、前出の郭崇に劣らぬ高貴な出自である。宋偃は水軍を操るのに長けており、陸地においても戦場で弓矢1本で虎を仕留めたほどの勇将であった。この宋偃の記述の後半に長女の孝章の話が出てくる。ちなみに孝章は北宋の太祖に嫁いだ。

孝章寝病、語晋国長公主曰「我瞑目無他憂、惟慮族屬不敦睦、胎笑於人。」(孝章病に寝たり、晋国の長公主に曰く「我瞑目にして他憂無し、惟だ族属の敦睦せずして人の胎を笑はるるを慮るのみ。」と。)

試訳：孝章は病気に臥した際、晋国の長公主に言うには「私は視野が狭い他は何の心配事はないが、一族の子孫が仲良くせず仲違いして周囲から笑われるのではないかとそれだけが気になるところです。)

(注：「胎」は子孫を示す。)

そして事実、景德年間(1004～1007)に元翰という子孫が一族の財産分与を不満とし訴訟する事件が起こした。その当時の皇帝である真宗は次のよう語る。

真宗聞之、詔釈勿問、仍諭其族属務遵先後遺戒焉。(真宗之を聞き、詔して釈して問ふこと勿し、仍ち其の族属の先後の遺戒を務め遵ぶを諭す。)

試訳：真宗は之を聞き、許して不問にした。そこでその一族に長く伝わる遺戒をつとめて遵ぶように諭した。

ところで、宋偃個人の伝の中にどうして娘の発言、並びに真宗の言葉が引かれているのか。考えるに娘の孝章の和を願う心や先見性はこの一族の中で育まれたものだと示したかったのかもしれない。ここで思い起こされるのは昨年度の拙稿で触れた「趙匡胤の遺訓」である。「家臣である士大夫の言動に寛容であれ」といった趣旨の戒めがあり、宋王朝の核となる人物に脈々と受け継がれていたと言われる。してみると宋偃の伝でありながら宋王朝の精神の核心がここに表出されていると言えるかもしれない。

人物紹介 その5 楊廷璋 ～子を授かる前の父の不思議な挿話～

最後に楊廷璋(⑯)について触れたい。この人物は後周の周祖に見出され頭角を現す。廷璋は周祖が亡くなった時に廷璋は血を吐いて数日食事を取らなかったほどであったと言うから二人の関係は深かったようだ。ここでは廷璋の父の洪裕の挿話を紹介したい。

洪裕少時、嘗漁於鄴襄陂、忽有馳騎至者、以二石雁授洪裕、一翼掩至、一翼掩右、曰「吾北嶽使者也。」言訖、忽不見。是年生淑紀、明年生廷璋、家遂昌盛。(洪裕少き時、嘗て鄴襄陂に漁す、忽ち騎を馳せ至る者有り、二石の雁を以て洪裕に授け、一翼掩ひ至り、一翼掩ひ右(みちび)ひて、曰く「吾北嶽の使者なり。」と。言ひ訖はりて、忽ち見ず。是の年淑紀生まれ、明年廷璋生まる、家遂に昌盛せり。)

試訳：(父の)洪裕が若い頃、鄴襄陂で魚釣りをしていたところ、突然馬を走らせてやってくる役人がいて二羽の雁を父洪裕に与えた。一羽は羽を覆い、もう一羽は導くしぐさを見せた。役人は「私は北嶽の使者であるぞ」と言い、そしてあっという間に見えなくなった。この年、(姉の)淑紀が生まれ、翌年、廷璋が生まれ、まもなく家運が栄えた。

暗示的な挿話であり、それだけに興味をそそられる。なぜ廷璋の父に突如雁を与える男が登場するのか。そしてなぜすぐに去ってしまったのか。いずれ二羽のそれぞれが姉と廷璋を暗示しているようだが、ここは解釈に苦しむところであり、上記の解釈は不正確であるかもしれない。この姉は列伝の前半で後周の周祖に嫁ぎ、確かに家運を盛り上げたと言える。これまで人物の周辺を探るといふ本論の流れに沿うならば、時に人智を超えた天命があるとでもいいたいのであろうか。

まとめ

『宋史』の論考の第2編目は、その人物の列伝の中に登場する周辺の者たちを取り扱ってみた。乳母によって一命を取りとめた延広。明宗に見出された趙賛。次女が存在により死後60年を経て位を与えられた郭崇。宋偃の文章では長女の思慮深い言動や先見性も示され、さらに楊廷璋においては父の不思議な話を挿入するといった話もあり、その意図するものに思いを巡らせた。2020年度はコロナ感染の中、現在も不安定な日常が取り巻いている。この論をまとめるにあたって焦点を絞れば、特に楊廷璋の文章が印象深い。不確定な未来には何らかの道筋があり、我々はその軌道に沿ってかけがえのない他者と交わりながら生涯を終えていく。これも一つの歴史観であろう。

参考文献一覧

『宋史』 維基文庫 自由的図書館 巻253～255 (列伝第8～12)
宮崎市定『中国史』 上下 岩波文庫